夫それおもみ以たまたまれば偶みじん十方微塵三悪の身を脱れて希まれに閻浮日本えんぶ爪上そうじょうの生を受く。亦閻浮日城にちいき爪上の生を捨て、十方微塵三悪の身を受けんこと疑ひ無きものなり。然るに生を捨て、悪趣あくしゅに墮する縁一だいちに非ず。或は妻子眷属けんぞくの哀憐あいれんに依り、或は殺生惡逆じゅうごうの重業じゅうごうに依り、或は国主と成りて民衆の歎きを知らざるに依り、或は法の邪正を知らざるに依り、或は悪師を信ずるに依る。此の中に於ても世間の善悪は眼前に在れば愚人も之を弁わかふべし。仏法の邪正、師の善悪に於ては証果しょうかの聖人すら尚之を知らず。況んや末代の凡夫に於てをや。加之しかのみならずぶつにち仏日西山よこうとういきに隠れ余光東域を照らしてより已来、四依の慧灯は日に減じ三蔵の法流は月に濁る、実経に迷へる論師は真理の月に雲を副へ、権経に執する訳者は実経の珠を砕きて権経の石と成す。何に況んや震旦の人師の宗義しゅうぎ其の悞り無からんや。何に況んや日本辺土の末学誤りは多く実は少なき者か。随つて其の教を学する人数は竜鱗りゅうりんより多けれども得道の者は鱗角りんかくより希なり。或は権教に依るが故に、或は時機不相応の教に依るが故に、或は凡聖ぼんしょうの教を弁へざるが故に、或は権実二教を弁へざるが故に、或は権教を実教と謂ふに依るが故に、或は位の高下を知らざるが故なり。凡夫の習ひ仏法に就いて生死の業を増すこと其の縁一に非ず。中昔邪智の上人有りて末代の愚人の為に一切の宗義を破して選択集せんたくしゅう一卷を造る。名を鸞・綽・導の三師らんしやくどうに依りて一代を二門に分ち、実経を録して権経に入れ、法華真言の直道を閉ぢて浄土三部の隘路あいろを開く。亦浄土三部の義にも順ぜずして権実の謗法を成し、永く四聖の種を断じて阿鼻の底に沈むべき僻見びやくけんなり。而るに世人せんにん之に順ふこと譬へば大風のしたか小樹の枝を吹くが如く、門弟此の人を重んずること天衆の帝釈てんしやくを敬ふに似たり。此の悪義を破らんが為に亦多くの書有り。所謂浄土決義抄・弾選択・摧邪輪等なり。此の書を造る人、皆碩徳の名一天はびこに弥ると雖も、恐らくは未だ選択集謗法の根源を頭はさず、故に還つて悪法の流布を増す。譬へば盛んなる旱魃かんぱつの時に小雨を降らせば草木いよいよ弥枯れ、兵者を打つ刻みに弱き兵を先んずれば強敵ますます倍力を得るが如し。予此の事を歎く間、一卷の書を造りて選択集の謗法の縁起えんぎを頭はし、名づけて守護国家論と号す。願はくは一切の道俗どうぞく、一時の世事を止めて永劫の善苗ぜんみょうを種うゑよ。今経論を以て邪正を直す、信謗は仏説ただに任せ敢へて自義を存すること無し。

分ちて七門と為す。一には如来の経教に於て権実二教を定むることを明かし、二には正像末の興廢しょうざうまつを明かし、三には選択集こうはいの謗法の縁起を明かし、四には謗法の者を対治すべき証文を出だすことを明かし、五には善知識並びに真実の法には値ひ難きことを明かし、六には法華涅槃に依る行者の用心を明かし、七には問ひに随つて答へを明かす。

大文の第一に、如来の経教に於て権実二教を定むることを明かさば、此に於て四有り。

一には大部の經の次第を出だして流類を撰することを明かし、二には諸經の淺深を明かし、三には大小乗を定むることを明かし、四には且く權を捨て、實に就くべきことを明かす。

第一に大部の經の次第を出だして流類を撰することを明さば、問うて云はく、仏最初に何なる經を説きたまふや。答へて云はく、華嚴經なり。問うて云はく、其の証如何。答へて云はく、六十華嚴經の離世間淨眼品に云はく、「是くの如く我聞く、一時仏摩竭提國寂滅道場に在って始めて正覺を成ず」と。法華經の序品に放光端の時、彌勒菩薩十方世界の諸仏の五時の次第を見る時、文殊師利菩薩に問うて云はく「又諸仏聖主師子を睹たてまつるに經典の微妙第一なるを演説したまふ。其の聲清淨に柔軟の音を出だして諸の菩薩を教へたまふこと無数億萬なり」と。亦方便品に仏自ら初成道の時を説いて云はく「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行して、乃至爾の時に諸の梵王及び諸の天帝釋・護世の四天王及び大自在天並びに余の諸の天衆眷屬百千萬、恭敬合掌し礼して我に轉法輪を請ず」と。此等の説は法華經に華嚴經の時を指す文なり。故に華嚴經の第一に云はく「毘沙門天王略月天子略日天子略釋提桓因略大梵略摩醯首羅等略」^{已上}。涅槃經に華嚴經の時を説いて云はく「既に成道し已はって梵天勸請すらく、唯願はくは如来當に衆生の為に広く甘露の門を開き給ふべし。乃至梵王復言はく、世尊一切衆生に凡そ三種有り、所謂利根・中根・鈍根なり。利根は能く受く、唯願はくは為に説き給へ。仏言はく、梵王諦かに聽け諦かに聽け。我今當に一切衆生の為に甘露の門を開くべし」と。亦三十三に華嚴經の時を説いて云はく「十二部經修多羅の中の微妙の義を我先に已に諸の菩薩の為に説くが如し」と。此くの如き等の文は皆諸仏世に出で給ひて一切經の初めには必ず華嚴經を説き給ひし証文なり。問うて云はく、無量義經に云はく「初めに四諦を説き乃至次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」と。此の文の如くんば般若經の後に華嚴經を説けり。相違如何。答へて云はく、淺深の次第なるか、或は後分の華嚴經なるか。法華經の方便品に一代の次第淺深を列ねて云はく「余乘^{華嚴經}なり若しは二^{般若經}なり若しは三^{方等經}なり有ること無し」と、此の意なり。

問うて云はく、華嚴經の次に何れの經を説き給ふや。答へて曰く、阿含經を説き給ふなり。問うて云はく、何を以て之を知るや。答へて云はく、法華經の序品に華嚴經の次の經を説いて云はく「若し人苦に遭ひて老病死を厭ふには為に涅槃を説く」と。方便品に云はく「即ち波羅奈に趣き乃至五比丘の為に説く」と。涅槃經に華嚴經の次の經を定めて云はく「即ち波羅奈國に於て正法輪を轉じて中道を宣説す」と。此等の經文は華嚴經より後に阿含經を説くなり。

問うて云はく、阿含經の後に何れの經を説き給ふや。答へて曰く、方等經なり。問うて云はく、何を以て之を知るや。答へて云はく、無量義經に云はく「初めに四諦を説き乃至次に方等十二部經を説く」と。涅槃經に云はく「修多羅より方等を出だす」と。問

うて云はく、方等とは天竺てんじくの語、此には大乘と云ふなり。華嚴・般若・法華・涅槃等皆大乘方等なり。何ぞ独ひとり方等部に限りて方等の名を立つるや。答へて曰く、実には華嚴・般若・法華等皆方等なり。然りと雖いえども今方等部に於て別して方等の名を立つることは私の義に非ず。無量義經・涅槃經の文に顯然たり。阿含の証果は一向小乗なり。次に大乘を説く。方等より已後皆大乘と云ふと雖いえども、大乘の始めなるが故に初めに従つて方等部を方等と云ふなり。例せば十八界の十半は色しきなりと雖いえども、初めに従つて色境の名を立つるが如し。

問うて曰く、方等部の諸經の後には何れの經を説き給ふや。答へて曰く、般若經なり。問うて曰く、何を以て之を知るや。答へて曰く、涅槃經に云はく「方等より般若を出だす」と。

問うて曰く、般若經の後には何れの經を説き給ふや。答へて曰く、無量義經なり。問うて曰く、何を以て之を知るや。答へて曰く、仁王經にんのうに云はく「二十九年中」と。無量義經に云はく「四十余年」と。問うて曰く、無量義經には般若經の後に華嚴經を列ね、涅槃經には般若經の後に涅槃經を列ぬ。今の所立しよりゆうの次第は般若經の後に無量義經を列ぬ、相違如何。答へて曰く、涅槃經第十四の文を見るに、涅槃經已前の諸經を列ねて涅槃經に対して勝劣を論じて法華經を挙げず。第九の卷に於て法華經は涅槃經より已前なりと之を定め給ふ。法華經の序品を見るに無量義經は法華經の序分なり。無量義經には般若の次に華嚴經を列ぬれども、華嚴經を初時に遣れば般若經の後は無量義經なればなり。

問うて曰く、無量義經の後に何れの經を説き給ふや。答へて曰く、法華經を説き給ふなり。問うて曰く、何を以て之を知るや。答へて曰く、法華經の序品に云はく「諸の菩薩の為に大乘經の無量義・教菩薩法・仏所護念と名づくるを説き給ふ。仏此の經を説き已はつて結跏趺坐し無量義處三昧に入りたまふ」と。

問うて曰く、法華經の後に何れの經を説きたまふや。答へて曰く、普賢經を説き給ふなり。問うて曰く、何を以て之を知るや。答へて曰く、普賢經に云はく「却きつて後三月我当まさに般涅槃はつねはんすべし、乃至如来昔者闍崛山及び余の住處ぎしゃくつせんに於て已すでに広く一実の道を分別す。今も此處に於てす」と。

問うて曰く、普賢經の後に何れの經を説き給ふや。答へて曰く、涅槃經を説き給ふなり。問うて曰く、何を以て之を知るや。答へて曰く、普賢經に云はく「却きつて後三月我当まさに般涅槃すべし」と。涅槃經三十に云はく「如来何が故ぞ二月に涅槃したまふや」と。亦云はく、「如来しよしやうの初生・出家・成道・轉妙法輪てんみやうほうりん皆八日を以てす。何ぞ仏の涅槃独ひとり十五日なるや」と。

大部の經大概是くの如し。此より已外諸の大小乗經は次第不定なり。或は阿含經より已後に華嚴經を説き法華經より已後に方等般若を説く。皆義類を以て之を収めて一處に置くべし。

第二に諸經の淺深を明かさば、無量義經に云はく「初めに四諦を説き、次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き、菩薩の歴劫修行を宣説す」と。亦云はく「四十余年には未だ眞實を顯はさず」と。又云はく「無量義經は尊にして過上無し」と。此等の如くんば四十余年の諸經は無量義經に劣ること疑ひ無き者なり。問うて曰く、密嚴經に云はく「一切の經中に勝れたり」と。大雲經に云はく「諸經の轉輪聖王なり」と。金光明經に云はく「諸經中の王なり」と。此等の文を見るに諸大乘經の常の習ひなり、何ぞ一文を瞻て無量義經は四十余年の諸經に勝ると云ふや。答へて云はく、教主釈尊若し諸經に於て互ひに勝劣を説かば、大小乗の差別・権實の不同有るべからず。若し實に差別無きに互ひに差別淺深等を説かば、諍論の根源、悪業起罪の因縁なり。爾前の諸經の第一とは縁に随つて不定なり。或は小乗の諸經に対して第一と、或は報身の壽を説いて諸經の第一と、或は俗諦眞諦中諦等を説いて第一なりと。一切の第一に非ず。今の無量義經の如きは四十余年の諸經に対して第一なり。

問うて云はく、法華經と無量義經と何れか勝れたるや。答へて云はく、法華經勝れたり。問うて云はく、何を以て之を知るや。答へて云はく、無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明かさず。故に法華經に嫌はれて今説の中に入るなり。

問うて云はく、法華經と涅槃經と何れか勝れたるや。答へて云はく、法華經勝るゝなり。問うて曰く、何を以て之を知るや。答へて曰く、涅槃經に自ら如法華中等と説いて更無所作と云ふ。法華經に当説を指して難信難解と云はざるが故なり。

問うて云はく、涅槃經の文を見るに涅槃經已前をば皆邪見なりと云ふ、如何。答へて云はく、法華經は如来出世の本懐なる故に「今者已満足」「今正是其時」「然善男子、我実成仏已来」等と説く。但し諸經の勝劣に於ては仏自ら「我所説經典、無量千万億」なりと挙げ了つて「已説・今説・当説」等と説く時、多宝仏、地より涌現して皆是眞實と定め、分身の諸仏は舌相を梵天に付けたまふ。是くの如く諸經と法華經との勝劣を定め了んぬ。此の外釈迦如来一仏の所説なれば、先後の諸經に対して法華經の勝劣を論ずべきに非ず。故に涅槃經に諸經を嫌ふ中に法華經を入れず、法華經は諸經に勝るゝ由、之を顯はす故なり。但し邪見の文に至りては、法華經を覚知せざる一類の人、涅槃經を聞いて悟りを得る故に、迦葉童子、自身並びに所引を指して涅槃經より已前を邪見等と云ふなり。經の勝劣を論ずるには非ず。

第三に大小乗を定むることを明かさば、問うて云はく、大小乗の差別如何。答へて云はく、常途の説の如くんば阿含部の諸經は小乗なり。華嚴・方等・般若・法華・涅槃等は大乘なり。或は六界を明かすは小乗、十界を明かすは大乘なり。其の外法華經に対して実義を論ずる時、法華經より外の四十余年の諸大乘經は皆小乗にして法華經は大乘なり。

問うて云はく、諸宗に亘つて我が拠る所の經を實大乘と謂ひ、余宗の拠る所の經を権

大乘經と云ふこと常の習ひなり。末学に於て是非定め難し。未だ法華經に対して諸大乘經を小乗と称する証文を聞知せず、如何。答へて云はく、宗々の立義互ひに是非を論ず。就中末法に於て世間出世に就いて非を先とし是を後とす。自らは是非を知らざるは愚者の歎ずべき所なり。但し且く我等が智を以て四十余年の現文を見るに、此の文を破る文無ければ人の是非を信用すべからざるなり。其の上法華經に対して諸大乘經を小乗と称することは自答を存すべきに非ず。法華經の方便品に云はく「仏は自ら大乘に住し給へり。乃至自ら無上道大乘平等の法を証す。若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば我則ち慳貪に墮せん。此の事は為めて不可なり」と。此の文の意は法華經より外の諸經を皆小乗と説けるなり。亦寿量品に云はく「小法を樂ふ」と。此等の文は法華經より外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるなり。天台・妙樂の釈に於て四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも他師之を許すべからず。故に但經文を出だすなり。

第四に且く權經を聞いて實經に就くことを明かさば、問うて云はく、証文如何。答へて曰く、十の証文有り。法華經に云はく「但大乘經典を受持することを樂つて乃至余經の一偈をも受けざれ」^一 涅槃經に云はく「了義經に依つて不了義經に依らざれ」^二 四十余年を不了義經と云ふ。是^二 法華經に云はく「此の經は持ち難し。若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す。諸仏も亦然なり。是くの如き人は諸仏の歎ずる所なり。是則ち勇猛なり、是則ち精進なり、是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名づく」^三 末代に於て四十余年の持戒無く唯法華經を持つて持戒と爲す。是^三 涅槃經に云はく「乘に緩なる者に於ては乃ち名づけて緩と爲す。戒に緩なる者に於ては名づけて緩と爲さず。菩薩摩訶薩此の大乗に於て心懈慢せずんば是を奉戒と名づく。正法を護るが爲に大乘の水を以て自ら澡浴す。是の故に菩薩破戒を現ずと雖も名づけて緩と爲さず」^四 是の文法華經の戒を流通する文なり。是^四 法華經第四に云はく「妙法華經乃至皆是真實なり」^五 此の文は多寶の證明なり。是^五 法華經第八普賢菩薩の誓ひに云はく「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」^六 法華經第七に云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に閻浮提に於て断絶せしむること無けん」^七 釈迦如来の誓ひなり。是^七 法華經第四に多寶並びに十方諸仏來集の意趣を説いて云はく「法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給へり」^八 法華經第七に法華經を行ずる者の住处を説いて云はく「如来の滅後に於て當に一心に受持・誦・誦・解説・書寫し説の如く修行すべし。所在の国土に乃至若しは經卷所在の處ならば、若し園中に於ても、若しは林中に於ても、若しは樹下に於ても、若しは僧坊に於ても、若しは白衣の舎にても、若しは殿堂に在つても、若しは山谷曠野にても、是の中に皆塔を起て、供養すべし。所以は何ん。當に知るべし、是の處は即ち是道場なり。諸仏此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得」^九 法華經の流通たる涅槃經の第九に云はく「我が涅槃の後正法未だ滅せず、余の八十年の爾の時、是の經閻浮提に於て當に広く流布すべし。是の時當に諸の惡比丘有つて是の經を抄掠し、分かつて多分と作し、能く正法の色香味美を滅すべし。是の諸の惡人復是くの如き經典を讀誦すと雖も、如来深密の要義を滅除して、世間莊嚴

の文飾無義の語を安置し、前を抄して後に著け、後を抄して前に著け、前後を中に著け、中を前後に著けん。当に知るべし、是くの如き諸の悪比丘は是魔の伴侶なり。乃至譬へば牧牛女の多く水を加ふる乳の如し。諸の悪比丘も亦復是くの如し。雑ふるに世語を以てし錯りて是の経を定む。多くの衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬することを得ざらしむ。是の悪比丘は利養の為の故に是の経を広宣流布すること能はず。分流すべき所少くして言ふに足らざること彼の牧牛貧窮の女人展転して乳を売り乃至糜と成すに乳味無きが如し。是大乗經典大涅槃經も亦復是くの如し。展転し薄淡にして気味有ること無し。気味無しと雖も猶余経に勝ること是一千倍なること彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝ると為すが如し。何を以ての故に。是の大乗經典大涅槃經は声聞の経に於て最も為れ上首たり」^是

問うて云はく、不了義経を捨て、了義経に就くとは、大円覚修多羅了義経・大仏頂如来密因修証了義経、是くの如き諸大乗経は皆了義経なり。依用と為すべきや。答へて曰く、了義・不了義は所対に随つて不同なり。二乗・菩薩等の所説の不了義経に対すれば一代の仏説は皆了義なり。仏説に就いて亦小乗経は不了義、大乗経は了義なり。大乗に就いて又四十余年の諸経は不了義経、法華・涅槃・大日経等は了義経なり。而るに円覚・大仏頂等の諸経は小乗及び歴劫修行の不了義経に対すれば了義経なり。法華経の如き了義には非ざるなり。

問ふて曰く、華嚴・法相・三論等、天台・真言より以外の諸宗の高祖、各其の依憑の経々に依つて其の経々の深義を極めたりと欲へり。是爾るべきや如何。答へて云はく、華嚴宗の如きは、華嚴経に依つて諸経を判じて華嚴経の方便と為すなり。法相宗の如きは、阿含・般若等を卑しめ、華嚴・法華・涅槃を以て深密経に同じ、同じく中道教と立つると雖も、亦法華・涅槃は一類の一乗を説くが故に不了義経なり、深密経には五性各別を存するが故に了義経と立つるなり。三論宗の如きは、二蔵を立て、一代を撰し、大乗に於て浅深を論ぜず。而も般若経を以て依憑と為す。此等の諸宗の高祖多分は四依の菩薩なるか、定めて所存有らん、是非に及ばず。然りと雖も自身の疑ひを晴らさんが為に且く人師の異解を聞いて諸宗の依憑の経々を開き見るに、華嚴経は旧訳は五十・六十、新訳は八十・四十なり。其の中に法華・涅槃の如く一代聖教を集めて方便と為すの文無し。四乗を説くと雖も、其の中の仏乘に於て十界互具久遠実成を説かず。但し人師に至りて五教を立て、先の四教に諸経を収めて華嚴経の方便と為す。法相宗の如きは、三時教を立てる時法華等を以て深密経に同ずと雖も、深密経五巻を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。三論宗の如きは、二蔵を立てる時、菩薩蔵に於て華嚴・法華等を収め般若経に同ずと雖も、新訳の大般若経を開き見るに全く大般若を以て法華・涅槃に同ずるの文無し。華嚴は頓教、法華は漸教等とは人師の意樂にして仏説に非ざるなり。法華経の如きは、序分の無量義経に慥かに四十余年の年限を挙げ、

華嚴・方等・般若等の大部の諸經の題名を呼んで未顕眞実と定め、正宗の法華經に至りて一代の勝劣を定むる時「我が所説の經典、無量千萬億にして、已に説き今説き當に説かん」の金言を吐いて「而も其の中に於いて此の法華經は最も為れ難信難解なり」と説きたまふ時、多寶如來、地より涌出して妙法華經皆是眞実と証誠し、分身の諸仏十方よりことごと尽く一処に集りて舌を梵天に付けたまふ。今此の義を以て余推察を加ふるに、唐土日本に渡れる所の五千七千余卷の諸經以外の、天竺・竜宮・四王天・過去の七仏等の諸經並びに阿難の未結集の經、十方世界の塵に同ずる諸經の勝劣・淺深・難易掌中に在り。「無量千萬億」の中に豈釈迦如來の所説の諸經漏るべきや。已説・今説・當説の年限に入らざる諸經之有るべきや。願はくは末代の諸人且く諸宗の高祖の弱文無義をさしお聞いて、釈迦・多寶・十方諸佛の強文有義を信ずべし。何に況んや諸宗の末学の偏執を先と爲し、末代の愚者の人師を本と爲して經論を抛つ者に依憑すべきや。故に法華の流通たる双林最後の涅槃經に仏迦葉童子菩薩に遺言して言はく「法に依つて人に依らざれ、義に依つて語に依らざれ、智に依つて識に依らざれ、了義經に依つて不了義經に依らざれ」云云。

予世間を見聞するに、自宗の人師を以て三昧發得智慧第一と稱すれども無徳の凡夫にして、実經に依つて法門を信ぜしめず、不了義の觀經等を以て時機相応の教と稱し、了義の法華・涅槃をさしお聞いて、譏りて理深解微の失を付く。如來の遺言に背いて、人に依つて法に依らざれ、語に依つて義に依らざれ、識に依つて智に依らざれ、不了義經に依つて了義經に依らざれと談ずるに非ずや。請ひ願はくは心有らん人は思惟を加へよ。如來の入滅は既に二千二百余の星霜を送れり。文殊・迦葉・阿難、經を結集せし已後、四依の菩薩重ねて世に出でて論を造り經の意を申ぶ。末の論師に至りて漸く誤り出来ず。亦訳者に於ても梵・漢未達の者有り。權教宿習の人は、実の經論の義を曲げて權の經論の義を存せり。之に就いて亦唐土の人師、過去の權教の宿習の故に權の經論心に叶ふ間、実の經論を用ひず。或は小し自義に違ふ文有れば理を曲げて会通を構へ、以て自身の義に叶はしむ。設ひ後に道理と念ふと雖も、或は名利に依り、或は檀那の歸依に依つて、權宗を捨てゝ実宗に入らず。世間の道俗亦無智の故に理非をわきま弁へず。但人に依つて法に依らず。設ひ惡法たりと雖も多人の邪義に随つて一人の実説に依らず。而るに衆生の機多くは流轉に随ひ、設ひ出離を求むるにも亦多分は權經に依る。但恨むらくは惡業の身、善に付け惡に付け生死を離れ難きのみ。然りと雖も今の世の一切の凡夫設ひ今生を損ずと雖も、上に出だす所の涅槃經第九の文に依つて且く法華・涅槃を信ぜよ。其の故は世間の淺事すら多く展轉する時は虚は多く実は少なし。況んや佛法の深義に於てをや。如來の滅後二千余年の間、仏經に邪義を副へ來たり、万に一も正義無きか。一代の聖教多分は誤り有るか。所以に心地觀經の法爾無漏の種子、正法華經の屬累の經末、婆沙論の一十六字、撰論の識を八・九に分かつ、法華論と妙法華經との相違、涅槃論の法華煩惱に汚さるゝの文、法相宗の定性無性の不成仏、撰論宗の法華經の

いっしょうなむ べつじいしゅ
一 称南無の別時意趣、此等は皆訳者人師の誤りなり。此の外に亦四十余年の経々に於て多くの誤り有るか。設ひ法華・涅槃に於て誤り有るも誤り無きも、四十余年の諸経を捨て、法華・涅槃に随ふべし。其の証上に出だし了んぬ。況んや誤り有る諸経に於て信心を致す者生死を離るべきや。

大文の第二に、正像末に就いて仏法の興廢有ることを明かさば、之に就いて二有り。一には爾前四十余年の内の諸経と浄土の三部経との末法に於ける久住・不久住を明かし、二には法華・涅槃と浄土の三部経並びに諸経との久住・不久住を明かす。

第一に、爾前四十余年の内の諸経と浄土の三部経との末法に於ける久住・不久住を明かさば、問うて云はく、如来の教法は大小・浅深・勝劣を論ぜず、但時機に依って之を行ぜば定めて利益有るべきなり。然るに賢劫・大術・大集等の諸経を見るに仏滅後二千余年已後は仏法皆滅して但教のみ有りて行証有るべからず。随って伝教大師の末法灯明記を開くに「我が延暦二十年辛巳一千七百五十歳」一説なり。延暦二十年より已後亦四百五十余歳なり。既に末法に入れり。設ひ教法有りと雖も行証無けん。然るに於ては仏法を行ずる者万が一も得道有り難きか。然るに双観経の「当来の世経道滅尽せん到我慈悲哀愍を以て特り此の経を留めて止住せんこと百歳ならん。其れ衆生の斯の経に値ふこと有らん者は意の所願に随って皆得度すべし」等の文を見るに、釈迦如来一代の聖教皆滅尽の後、唯特り双観経の念仏のみを留めて衆生を利益すべしと見え了んぬ。此の意趣に依って粗浄土家の諸師の積を勘ふるに其の意無きに非ず。道綽禪師は「当今末法は是五濁悪世なり、唯浄土の一門のみ有りて通入の路なるべし」と書し、善導和尚は「万年に三宝滅し此の経のみ住すること百年なり」と宣べ、慈恩大師は「末法万年に余経悉く滅し、弥陀の一教利物偏に増す」と定め、日本国の叡山の先徳慧心僧都は一代聖教の要文を集め末代の指南を教ふる往生要集の序に云はく「夫往生極楽の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か帰せざる者あらん。但し顕密の教法は其の文一に非ず。事理の業因其の行惟多し。利智精進の人は未だ難しと為ず。予が如き頑魯の者豈敢へてせんや」と。乃至次下に云はく「就中念仏の教は多く末代経道滅尽して後の濁悪の衆生を利する計りなり」と。総じて諸宗の学者も此の旨を存ずべし。殊に天台一宗の学者誰か此の義に背くべけんや如何。答へて云はく、爾前四十余年の経々は各時機に随って而も興廢有るが故に、多分は浄土の三部経より已前に滅尽有るべきか。諸経に於ては多く三乗現身の得道を説く。故に末代に於ては現身得道の者之少なり。十方の往生浄土は多くは末代の機に蒙らしむ。之に就いて、西方極楽は娑婆隣近なるが故に、最下の浄土なるが故に、日輪東に出で西に没するが故に諸経に多く之を勧む。随って浄土の祖師のみ独り此の義を勧むるに非ず。天台・妙楽等も亦爾前の経に依るの日は且く此の筋有り。亦独り人師のみに非ず、竜樹・天親も此の意有り。是一義なり。亦仁王経等の如きは浄土の三部経より尚久しく末法万年の後八千年住すべしとなり。故に

爾前の諸經に於ては一定^{いちじょう}すべからず。

第二に、法華・涅槃と浄土の三部經との久住・不久住を明かさば、問うて云はく、法華・涅槃と浄土の三部經と何れか先に滅すべきや。答へて云はく、法華・涅槃より已前に浄土の三部經は滅すべきなり。問うて云はく、何を以て之を知るや。答へて云はく、無量義經に四十余年の大部の諸經を挙げ^{おわ}了^{こも}って未^そ顕^{かん}眞^ぎ實^{ょう}と云ふ。故に双^そ觀^{くわん}經^{ぎやう}等の「特^{ひと}り此の經を留^{りや}む」の言、皆方便なり、虚妄なり。華嚴・方等・般若・觀經等の速疾・歴劫の往生・成仏は、無量義經の実義を以て之を檢^{かん}ふるに「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無^つ上^{じやう}菩^ぼ提^{だい}を成^なずることを得^えず。乃至^な險^{けん}しき^し徑^{ぎやう}を行^なく^るに留^{りや}難^{なん}多^たきが故に」といふ經なり。往生・成仏俱に別時意趣なり。大集・双觀經等の住^{じゆ}滅^{めつ}の先後は皆隨宜の一説なり。法華經に來たらざる已前は彼の外道の説に同じ。譬へば江河の大海に趣かず、民臣の大王に隨はざるが如し。身を苦しめ行を作すとも法華・涅槃に至らずんば一分の利益無く、有因無果の外道なり。在世滅後俱に教有りて人無く、行有りて証無きなり。諸木は枯るゝと雖も松^{しょう}柏^{はく}は萎^しまず。衆草は散ると雖も鞠^{きく}竹^{ちく}は変^{へん}ぜず。法華經も亦復是くの如し。積尊の三説・多宝^{たう}の証^{じやう}明^{めい}・諸^{しよ}仏^{ぶつ}の舌^{ぜつ}相^{さう}偏^{へん}に令^{りやう}法^{ぽう}久^く住^{じゆ}に在^ざるが故なり。

問うて云はく、諸經滅尽の後特^{ひと}り法華經留^{りや}まるべき証文如何。答へて云はく、法華經の法師品に積尊自ら流通せしめて云はく、「我が所説の經典無量千万億にして已に説き今説^{まさ}き當^{あた}に説^すかん。而も其の中に於て此の法華經最も為^なれ難^{なん}信^{しん}難^{なん}解^げなり」云云。文の意は一代五十年の已今當の三説に於て最第一の經なり。八万聖教の中に殊に未來に留めんと欲して説きたまひしなり。故に次の品に多宝如来は地より涌出し、分身の諸仏は十方より一處^{らい}に來^{じゆ}集^{じつ}し、釈迦如来は諸佛を御使ひとして、八方四百万億那由他の世界に充滿せる菩薩・二乘・人・天・八部等を責めて云はく、多宝如来並びに十方の諸佛、涌出來集の意趣は偏^おに令^お法^お久^お住^おの為^たなり、各^た三^{しん}説^{ごん}の諸經滅尽の後慥かに未來五濁難信の世界に於て此の經を弘めんと誓言を立てよと。時に二万の菩薩、八十万億那由佗の菩薩、各誓状を立てゝ云はく「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」と。千世界の微塵の菩薩文殊等皆誓って云はく「我等佛の滅後に於て乃至當に広く此の經を説くべし」云云。其の後佛十^{じゆ}喻^うを挙げたまふ。其の第一の喻へは川^た流^せ江^ん河^がを以て四十余年の諸經に譬へ、法華經を以て大海に譬ふ。末代濁惡の無慚無愧の大旱魃の時、四味の川流江河は竭くると雖も法華經の大海は減少せず等と説き了^おって、次下に正しく説いて云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」と定め了んぬ。

備^{つら}文^{つら}の次第を按ずるに、「我が滅度の後」の次の後の字は、四十余年の諸經滅尽の後の後の字なり。故に法華經の流通たる涅槃經に云はく「応に無上の佛法を以て諸の菩薩に付すべし。諸の菩薩は善能問答するを以てなり。是くの如き法室は即ち久住することを得。無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」^り。此くの如き等の文は法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆべからざる經なり。此の義を知らざる世間の学者、大集^{ごん}権^{もん}門

の五五百歳の文を以て此の経に同じ、浄土の三部経より已前に滅尽すべしと存する立義りゅうぎは一経先後きじんの起尽を忘れたるなり。

問うて云はく、上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師、皆法華・真言等の諸経に於て末代不相応の釈を作る。之に依つて源空並びに所化の弟子、法華・真言等を以て雑行と立て難行道と疎み、行者をば群賊・悪衆・悪見の人等と罵り、或は祖父の履くつに類し聖光房の語、或は絃歌等にも劣ると云ふ南無房の語、其の意趣を尋ぬれば偏に時機不相応の義を存するが故なり。此等の人師の釈を如何に之を会すべきや。答へて云はく、釈迦如来一代五十年の説教、一仏の金言に於て権実二教を分け、権経を捨て、実経に入らしむる仏語けんねん顕然たり。此に於て「若し但ただ仏乗を讃めば衆生苦もつざいに没在せん」の道理を恐れ、且く四十二年の権経を説くと雖も、「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば、我則ち慳貪すなわに墮せん」の失とがを脱れんが為に「大乘に入るを本と為す」の義を存し、本意を遂げて法華経を説きたまふ。

然るに涅槃経に至りて「我滅度せば必ず四依を出だして権実二教を弘通せしめん」と約束おわし了んぬ。故に竜樹菩薩は如来の滅後八百年に出世して十住毘婆沙等の権論を造りて華嚴・方等・般若等の意を宣べ、大論を造りて般若・法華の差別を分かち、天親菩薩は如来の滅後九百年に出世して俱舍論を造りて小乗の意を宣べ、唯識論を造りて方等部の意を宣べ、最後に仏性論を造りて法華・涅槃の意を宣べ、了教・不了教を分かちて敢へて仏の遺言あに違はず。末の論師並びに訳者の時に至りては一向権経に執するが故に、実経を会えして権経に入れ権実雑乱の失出来せり。亦人師の時に至りては各依憑の経を以て本と為すが故に余経を以て権経と為す。是よりいよいよ弥いよいよ仏意に背く。

而るに浄土の三師に於ては曇鸞・道綽の二師は十住毘婆沙論に依つて難易なんい聖い浄しやうじやうの二道を立つ。若し本論に違して法華・真言等を以て難易の内に入れば信用に及ばず。随つて浄土論註並びに安樂集を見るに多分は本論の意に違せず。善導和尚は亦浄土の三部経に依つて弥陀称名等の一行一願の往生を立つる時、梁・陳・隋・唐の四代の撰論師、総じて一代聖教を以て別時意趣と定む。善導和尚の存念に違せるが故に撰論師を破する時、彼の人を群賊等に譬ふ。順次往生の功德を賊するが故なり。其の所行を雑行と称することは、必ず万行を以て往生の素懐を遂ぐる故をば此の人初むる故に千中無一と嫌へり。是の故に善導和尚も雑行の言の中に敢へて法華・真言等を入れず。

日本国の源信僧都は亦叡山第十八代の座主慈慧大師の御弟子なり。多くの書を造れども皆法華を弘めんが為なり。而るに往生要集を造る意は爾前四十余年の諸経に於て往生・成仏の二義有り。成仏の難行に対して往生易行の義を存し、往生の業の中に於て菩提心観念の念仏を以て最上と為す。故に大文第十の問答料簡の中、第七の諸行勝劣門れつもんに於ては念仏を以て最勝と為す。次下に爾前最勝の念仏を以て法華経の一念信解の功德に対して勝劣を判ずる時、一念信解の功德は念仏三昧より勝る、こと百千万倍なり

と定めたまへり。当に知るべし、往生要集の意は爾前最上の念仏を以て法華最下の功德
 に対して、人をして法華經に入らしめんが為に造る所の書なり。故に往生要集の後に一
 乗要決を造りて自身の内証を述ぶる時、法華經を以て本意と為す。而るに源空並びに
 所化の衆此の義を知らざるが故に、法華・真言を以て三師並びに源信の所破の難聖雜
 並びに往生要集の序の顯密の中に入れて、三師並びに源信を法華・真言の謗法の人と作
 す。其の上日本国は一切の道俗を化し法華・真言に於て時機不相応の旨を習はしめ、在
 家出家の諸人に於て法華・真言の結縁を留む。豈仏の記し給ふ所の「惡世中比丘邪智
 心諂曲」の人に非ずや。亦、「則斷一切世間仏種」の失を免るべきや。其の上山門・寺門
 ・東寺・天台並びに日本国中法華・真言等を習ふ諸人を群賊・惡衆・惡見の人等に譬ふ
 る源空が重罪、何れの劫にか其の苦果を經尽すべきや。法華經の法師品に持經者を罵
 る罪を説いて云はく「若し惡人有りて不善心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に
 仏を毀罵せん、其の罪尚輕し。若し人一つの惡言を以て在家出家の法華經を讀誦する者
 を毀謗せん其の罪甚だ重し」經文。一人の持者を罵る罪すら尚是くの如し。況んや書を造
 り日本国の諸人に罵らしむる罪をや。何に況んや此の經を千中無一と定め法華經を行ず
 る人に疑ひを生ぜしむる罪をや。何に況んや此の經を捨て、觀經等の權經に遷らしむる
 謗法の罪をや。願はくは一切の源空が所化の四衆、頓に選擇集の邪法を捨て、忽ち
 に法華經に遷り今度阿鼻の炎を脱れよ。

問うて云はく、正しく源空が法華經を誹謗する証文如何。答へて云はく、法華經の第
 二に云はく「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を斷ぜん」經文。不
 信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり。故に天親菩薩の仏性論の第一に此の
 文を釈して云はく「若し大乘に憎背するは此はは一闡提の因なり。衆生をして此の法を
 捨てしむるを為の故に」論文。謗法の相貌は此の法を捨てしむるが故なり。選擇集は人を
 して法華經を捨てしむる書に非ずや。「闍拋」の二字は仏性論の「憎背」の二字に非ず
 や。亦法華經誹謗の相貌は四十余年の諸經の如く小善成仏を以て別時意趣と定むる
 等なり。故に天台の釈に云はく「若し小善成仏を信ぜずんば則ち世間の仏種を斷ずるな
 り」と。妙樂重ねて此の義を宣べて云はく「此の經は遍く六道の仏種を開す。若し此
 の經を謗せば義斷に当たるなり」と。釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・天台・妙樂の
 意の如くんば源空は謗法の者なり。所詮選擇集の意は人をして法華・真言を捨てしめん
 と定め書き了んぬ。謗法の義疑ひ無き者なり。

大文の第三に選擇集謗法の縁起を出ださば、問うて云はく、何れの証拠を以て源空を
 謗法の者と稱するや。答へて云はく、選擇集の現文を見るに一代の聖教を以て二に分か
 つ。一には聖道・難行・雜行、二には淨土・易行・正行なり。其の中に聖・難
 ・雜といふは、華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃・大日經等なり取意。淨・易・正と
 云ふは、淨土三部經の稱名念仏等なり取意。聖・難・雜の失を判ずるには、末代の凡夫

之を行ぜば百の時に希まれに一・二を得、千の時に希まれに三・五を得ん、或は千が中に一も無し、或は群賊・悪衆・邪見・悪見・邪雜じゃざうの人等と定むるなり。浄・易・正とくの得を判ずるには、末代の凡夫之を行ぜば十は即ち十生じ、百は即ち百ひやくしやう生ぜん等なり。謗法の邪義是なり。

問うて云はく、一代聖教を聖道浄土・難行易行・正行雜行と分かつ。其の中に難・聖・雜を以て時機不相応と称すること但源空一人の新義に非ず、曇鸞・道綽・善導の三師の義なり。此亦此等人師の私あんの按あに非ず、其の源みなもとは竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり。若し源空を謗法の者と称せば竜樹菩薩並びに三師を謗法の者と称するに非ずや。答へて云はく、竜樹菩薩並びに三師の意は法華已前の四十余年の経々に於て難易等の義を存す。而るを源空より已来、竜樹並びに三師の難行等の語を借りて法華・真言等を以て難・雜等の内に入れぬ。所化の弟子、師とがの失を知らず、此の邪義を以て正義なりと存じ此の国に流布せしむるが故に、国中の万民悉く法華・真言等に於て時機不相応の想なひを作す。其上世間を貪むさぼる天台・真言の学者、世情に随はんが為に法華・真言等に於て時機不相応の悪言を吐いて選択集せんたくしゅうの邪義を扶たすけ、一旦いつたんの欲心に依つて釈迦・多宝並びに十方の諸仏の御評定ごひやうじやうの令りやう法ほう久住くじゆう於閻浮提えんぶだい宣流布せんりゅうぷの誠言じやうごんを壊り、一切衆生に於て一切三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せしむ。偏ひとえに是「悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲てんごくに未だ得ざるを為れ得たりと謂ひ、乃至悪鬼其の身に入り仏の方便ずい隨宜所説ぎの法を知らざる」が故なり。

問うて云はく、竜樹菩薩並びに三師、法華・真言等を以て難・聖・雜の内に入れざるを源空ひそ私かに之を入るとは何を以て之を知るや。答へて云はく、遠く余処に証拠を尋ぬべきに非ず。即ち選択集に之見えたり。問うて云はく、其の証文如何。答へて云はく、選択集の第一篇に云はく「道綽どうしやく禪師、聖道・浄土の二門を立て、而も聖道を捨て、正しく浄土に帰するの文」と約束おわし了つて、次下に安樂集を引き私の料簡りやうけんの段に云はく「初めに聖道門とは之に就いて二有り。一には大乘、二には小乗なり。大乘の中に就いて顕密・権実等の不同有りと雖も、今此の集の意は唯顕大及び権大を存す。故に歴劫迂回りやっこうの行に当たる。之に準じて之を思ふに、まさに密大及び実大をも存すべし」上 選択集の文なり。此の文の意は、道綽禪師の安樂集の意は法華已前の大小乗経に於て、聖道・浄土の二門を分かつと雖も、我私かに法華・真言等の実大・密大を以て四十余年の権大乘に同じて聖道門と称す。準じゆん之思之ししの四字是なり。此の意に依るが故に亦曇鸞の難・易の二道を引く時、私かに法華・真言を以て難行道の中に入れ、善道和尚の正・雜二行を分かつ時も亦私かに法華・真言を以て雜行の内に入る。総じて選択集の十六段に亘りて無量の謗法なを作す根源は、偏ひとえに此の四字より起こる。誤れるかな、畏おそろしきかな。

爰に源空の門弟、師の邪義を救ふて云はく、諸宗の常の習ひ、設ひ経論の証文無しと雖も義類の同じきを聚めて一処に置く。而も選択集の意は法華・真言等を集めて雜行の

内に入れ正行に対して之を捨つ。偏に經の法体を嫌ふに非ず。但風勢無き末代の衆生を常没の凡夫と定め、此の機に易行の法を撰ぶ時、称名念仏を以て其の機に当て、易行の法を以て諸經に勝ると立つ。権実・浅深等の勝劣を詮ずるに非ず。雑行といふも嫌って雑といふに非ず。雑と云ふは不純を雑と云ふ。其上諸の經論並びに諸師も此の意無きに非ず。故に叡山の先徳の往生要集の意偏に是の義なり。所以に往生要集の序に云はく「顕密の教法は其の文一に非ず。事理の業因其の行惟多し。利智精進の人は未だ難しと為ず、予が如き頑魯の者豈敢へてせんや。是の故に念仏の一門に依る」云云。此の序の意は慧心先徳も法華・真言等を破するに非ず。但偏に我等頑魯の者の機に当たりて法華・真言は聞き難く行じ難きが故に、我が身鈍根なるが故なり。敢へて法体を嫌ふには非ず。其上序より已外正宗に至るまで十門有り。大門第八の門に述べて云はく「今念仏を勧むることは余の種々の妙行を遮するに非ず。只是男女貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、之を修するに難からず、乃至臨終には往生を願求するに其の便宜を得ること念仏には如かず」^上。此等の文を見るに源空の選択集と源信の往生要集と一卷三卷の不同有りと雖も、一代聖教の中には易行を撰んで末代の愚人を救はんと欲する意趣は但同じ事なり。源空上人真言・法華を難行と立て、悪道に墮せば、慧心先徳も亦此の失を免るべからず如何。答へて云はく、汝師の謗法の失を救はんが為に事を源信の往生要集に寄せて謗法の上に弥重罪を招く者なり。其の故は釈迦如来五十年の説教に総じて先四十二年の意を無量義經に定めて云はく「險徑を行くに留難多きが故に」と。無量義經の已後を定めて云はく「大直道を行くに留難無きが故に」と。仏自ら難易勝劣の二道を分ちたまへり。仏より外等覺已下末代の凡師に至るまで自義を以て難易の二道を分け、是の義に背く者は外道・魔王の説に同じからんか。随つて四依の大士竜樹菩薩、十住毘婆沙論には法華已前に於て難易の二道を分ち、敢へて四十余年已後の經に於て難行の義を存せず。其上若し修し易きを以て易行と定めば、法華經の五十展轉の行は称名念仏より行じ易きこと百千万億倍なり。若し亦勝を以て易行と定めば、分別功德品に爾前四十余年の八十万億劫の間、檀・戒・忍・進・念仏三昧等先の五波羅蜜の功德を以て、法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德は、念仏三昧等の先の五波羅蜜に勝るゝこと百千万億倍なり。難易勝劣と謂ひ行浅功深と謂ひ、觀經等の念仏三昧を法華經に比するに、難行の中の極難行、勝劣の中の極劣なり。

其上悪人・愚人を扶くこと亦教の浅深に依る。阿含十二年の戒門には現身に四重五逆の者に得道を許さず。華嚴・方等・般若・双觀經等の諸經は阿含經より教深き故に觀門の時重罪の者を撰すと雖も、猶戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず。然りと雖も決定性の二乗、無性の闡提に於ては戒觀共に之を許さず。法華・涅槃等には、唯五逆・七逆・謗法の者を撰するのみに非ず亦定性・無性をも撰す。就中末法に於ては常没の闡提之多し。豈觀經等の四十余年の諸經に於て之を扶くべけんや。無性の常

没・決定性の二乗は但法華・涅槃等に限り。四十余年の経に依る人師は彼の経の機を取る。此の人は未だきょうそう教相を知らざる故なり。

但し往生要集は一往序文を見る時は法華・真言等を以て顕密の内に入れて殆ど末代の機に叶はずと書すと雖も、文に入りて委細に一部三卷の始末を見るに、第十の問答りょうけん料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時、観仏三昧・般舟三昧・十住毘婆沙論・宝積・大集等の爾前の経論を引いて、一切の万行に対して念仏三昧を以て王三昧と立て了んぬ。最後に一つの問答有り。爾前のぜんじょう禅定念仏三昧を以て法華経の一念信解に対するに百千万億倍劣ると定む。復問ひを通ずる時、念仏三昧を万行に勝るゝと云ふは爾前の当分なりと云云。当に知るべし、慧心の意は往生要集を造りて末代の愚機を調へて法華経に入れんが為なり。例せば仏の四十余年の経を以て権機を調へ法華経に入れたまふが如し。故に最後に一乗要決を造る。其の序に云はく「諸乗の権実は古来のあらそ諍ひなり。俱ともに経論に拠って互ひに是非を執す。余寛弘丙午の歳冬十月病中に歎いて曰く、仏法に遇ふと雖も仏意を了せず。若し終に手を空しうせば後悔何ぞ追ばん。爰に経論の文義、賢哲の章疏、或は人をして尋ねしめ或は自ら思忖して全く自宗・他宗の偏党を捨てゝ専ら権智・実智の深奥を探るに、終に一乗は真実の理、五乗は方便の説を得る者なり。既に今生の蒙を開く、何ぞ夕死の恨みを遺さんや」上。此の序の意は偏に慧心の本意を顕はすなり。自宗・他宗の偏党を捨つるの時、浄土の法門を捨てざらんや。一乗は真実の理を得る時、専ら法華経に依るに非ずや。源信僧都は永観二年甲申の冬十一月往生要集を造り寛弘丙午の冬十月の比、一乗要決を作る。其の中間二十余年。権を先にし実を後にす。宛も仏の如く亦竜樹・天親・天台等の如し。汝往生要集を便りと為て師の謗法の失を救はんと欲すれども敢へて其の義類に似ず。義類の同じきを以て一処に聚むとならば何等の義類同なるや。華嚴経の如きは二乗界を隔つるが故に十界互具なし。方等・般若の諸経も亦十界互具を許さず。観経等の往生極楽も亦方便の往生なり。成仏・往生俱に法華経の如き往生に非ず。皆別時意趣の往生・成仏なり。其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易きが故に念仏を以て易行と云ひ、四威儀に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・妙楽の釈を破る人なり。所以に妙楽大師は、末代の鈍者・無智の者等の法華経を行ずるに普賢菩薩並びに多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云はく「散心に法華を誦し禅三昧に入らず。坐立行一心に法華の文字を念ぜよ」上。此の釈の意趣は末代の愚者を摂せんが為なり。散心とは定心に対する語なり。誦法華とは八卷・一卷・一字・一句・一偈・題目・一心一念随喜の者五十展転等なり。坐立行とは四威儀を嫌はざるなり。一心とは定の一心にも非ず、理の一心にも非ず、散心の中の一心なり。念法華文字とは此の経は諸経の文字に似ず、一字を誦すと雖も八万宝蔵の文字を含み一切諸仏の功德を納むるなり。天台大師玄義の八に云はく「手に巻を執らざれども常に是の経を読み、口に言声無けれども遍く衆典を誦し、仏説法せざれども恒に梵

音を聞き、心に思惟せざれども普く法界を照らす」^上。此の文の意は手に法華經一部八卷を執らざれども是の經を信ずる人は昼夜十二時の持經者なり。口には誦經の声を出ださざれども法華經を信ずる者は日々時々念々に一切經を読む者なり。仏の入滅既に二千余年を経たり。然りと雖も法華經を信ずる者の許に仏の音声^{もと おんじょう}を留めて、時々刻々念々に我が死せざる由^{よし}を聞かしむるなり。心に一念三千を觀ぜざれども遍く十方法界を照らす者なり。此等の徳は偏に法華經を行ずる者に備はれるなり。是の故に法華經を信ずる者は、設ひ臨終の時、心に仏を念せず、口に經を誦せず、道場に入らずとも心無くして法界を照し、音無くして一切經を誦し、卷軸を取らずして法華經八卷を奉る徳之有り。是豈權教の念仏者の臨終正念を期して十念の念仏を唱へんと欲する者に百千万倍勝るゝの易行に非ずや。故に天台大師文句の十に云はく「都て諸經に勝るゝが故に隨喜功德品と言ふ」と。妙樂大師は法華經は諸經より淺機を取る、而るを人師此の義を弁へざるが故に法華經の機を深く取ることを破して云はく「恐らくは人謬りて解する者、初心の功德の大なることを測らずして功を上位に推りて此の初心を蔑る。故に今彼の行は淺く功の深きことを示して以て經力を顯はす」^上。以頭經力の積の意趣は、法華經は觀經等の權經に勝れたるが故に行は淺く功は深し。淺機を撰する故なり。若し慧心の先徳法華經を以て念仏より難行と定め、愚者・頑魯の者を撰せずと云はゞ、恐らくは逆路伽耶陀の罪を招かざらんや。亦恐人謬解の内に入らざらんや。総じて天台・妙樂の三大部の本末の意には、法華經は諸經に漏れたる愚者・悪人・女人・常没の闡提等を撰したまふ。他師仏意を覺らざるが故に法華經を諸經に同じ、或は地住の機に取り、或は凡夫に於ても別時意趣の義を存す。此等の邪義を破して人天・四悪を以て法華經の機と定む。種類・相對を以て過去の善惡を収む。人天に生ずる人豈過去の五戒十善無からんや等と定め了んぬ。若し慧心此の義に背かば豈天台宗を知れる人ならんや。而るを源空深く此の義に迷ふが故に往生要集に於て僻見を起こし、自らも失ひ他をも誤まる者なり。適宿善有りて実教に入りながら、一切衆生を化して權教に還らしめ、剩へ実教を破せしむ。豈惡師に非ずや。彼の久遠下種・大通結縁の者の五百・三千の塵点を經る者の如きは、法華の大教を捨てゝ爾前の權小に遷るが故に後には權經をも捨てゝ六道に回りぬ。不輕輕毀の衆は千劫阿鼻地獄に墮つ。權師を信じて実經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。而るに源空我が身唯実經を捨てゝ權經に入るのみに非ず、人を勸めて実教を捨てゝ權經に入らしめ亦權人をして実經に入らしめず。剩へ実經の行者を罵るの罪永劫にも浮かび難からんか。

問うて云はく、十住毘婆沙論は一代の通論なり。難・易の二道の内に何ぞ法華・真言・涅槃を入れざるや。答へて云はく、一代の諸大乘經に於て華嚴經の如きは初頓・後分有り。初頓の華嚴は二乗の成不成を論ぜず。方等部の諸經には一向二乗無性闡提の成仏を斥ふ。般若部の諸經も之に同じ。総じて四十余年の諸大乘經の意は法華・涅槃・大

日経等の如く二乗無性の成仏を許さず。此等を以て之をかんが検ふるに爾前・法華の相違水火の如し。滅後の論師とも竜樹・天親も亦俱に千部の論師なり。所造の論に通別の二論有り。通論に於ても亦二有り。四十余年の通論と一代五十年の通論となり。其の差別を分つにけつじょうしょう決定性の二乗・無性闡提の成不成を以て論のだいろん権実を定むるなり。而るに大論は竜樹菩薩の造、羅什三蔵のにじょうさぶつ訳なり。般若経に依る時は二乗作仏を許さず。法華経に依れば二乗作仏を許す。十住毘婆沙論も亦竜樹菩薩の造、羅什三蔵のの訳なり。此の論も亦二乗作仏を許さず。之を以て知んぬ、法華已前の諸大乘経の意を申べたる論なることを。問うて云はく、十住毘婆沙論のいずこ何処に二乗作仏を許さざるの文出でたるや。答へて云はく、十住毘婆沙論の第五に云はく、竜樹菩薩造羅什訳「若ししょうもんじ声聞地及びびやくしぶつじ辟支仏地に墮する是を菩薩の死と名づく。則ち一切の利を失す。若し地獄に墮すとも是くの如き畏れを生ぜず。若し二乗地に墮すれば則ち大怖畏を為す。地獄の中に墮すとも畢竟して仏に至ることを得。若し二乗地に墮すれば畢竟してしゃ仏道を遮す」上。此の文二乗作仏を許さず。宛も浄名等の於仏法中おぶつぼうちゅういによはいしゆ以如敗種の文の如し。問うて云はく、大論は般若経に依って二乗作仏を許さず。法華経に依って二乗作仏を許すの文如何。答へて曰く、大論の一百に云はく、竜樹菩薩造羅什三蔵訳「問うて曰く、更に何の法かじんじん甚深にして般若に勝れたる者有つて而も般若を以て阿難にぞくろい属累し、而も余経を以て菩薩に属累するや。答へて曰く、般若波羅蜜は秘密の法に非ず。而るに法華等の諸経は阿羅漢の受決作仏を説く。所以に大菩薩能く受持し用ふ。譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」と。亦九十三に云はく「阿羅漢の成仏は論義者の知る所に非ず。唯仏のみ能くりょう了したまふ」上。此等の文を以て之を思ふに、論師の権実は宛も仏の権実の如し。而るを権経に依る人師みだ猥りに法華等を以て觀経等の権説に同じ、法華・涅槃等の義を仮りて浄土三部経の徳と作し、な決定性の二乗・無性の闡提・常没等の往生を許す。権実雑乱の失脱れ難し。例せば外典の儒者の内典を賊みて外典をかざ莊るが如し。謗法の失まぬか免れ難きか。仏自ら権実を分けたまふ。其の栓を探るに決定性の二乗・無性有情の成不成是なり。而るに此の義を弁へざる訳者爾前の経々を訳せる時、二乗の作仏・無性の成仏を許す。此の義を知る訳者は爾前の経を訳する時二乗の作仏・無性の成仏を許さず。之に依って仏意を覚らざる人師も亦爾前の経に於て決定性・無性の成仏を明かすと見て法華・爾前同じき思ひをな作し、或は爾前の経に於て決定無性を嫌ふの文を見、此の義を以てりょうぎ了義経と為し、法華・涅槃を以て不了義経と為す。共に仏意を覚らず、権実二教に迷へり。此等の誤りを出ださば但源空一人に限るのみに非ず、てんじく天竺の論師並びに訳者より唐土の人師に至るまで其の義有り。所謂地論師・撰論師の一代の別時意趣、善導・懷感の法華経のえかん一称南無仏の別時意趣、此等は皆権実を弁へざるが故に出来する処の誤りなり。論を造る菩薩、経を訳する訳者、さんまいほつとく三昧発得の人師猶以て是くの如し。何に況んや末代の凡師に於てをや。問うて云はく、汝末学の身に於て何ぞ論師並びに訳者人師を破するや。答へて云はく、敢へて此の難を致すこと勿れ。

撰論師並びに善導等の釈は権実二經を弁へずして猥りに法華經を以て別時意趣と立つ。故に天台・妙樂の釈と水火を作す間、且く人師の相違を聞いて經論に付いて是非を検ふる時、権実の二教は仏説より出でたり。天親・竜樹重ねて之を定む。此の義に順ずる人師をば且く之を仰ぎ、此の義に順ぜざる人師をば且く之を用ひず。敢へて自義を以て是非を定むるに非ず。但相違を出だす計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出ださば、此に二有り。一には仏法を以て国王大臣並びに四衆に付嘱することを明かし、二には正しく謗法の人を王地に処するをば対治すべき証文を明かす。

第一に仏法を以て国王大臣並びに四衆に付嘱することを明かさば、仁王經に云はく「仏波斯匿王に告げたまはく乃至是の故に諸の国王に付嘱して比丘・比丘尼・清信男・清信女に付嘱せず。何を以ての故に、王の威力無きが故に。乃至此の經の三宝をば諸の国王四部の弟子に付嘱す」^上。大集經二十八に云はく「若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨て、擁護せずんば、無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失し、其の国に三種の不詳の事を出ださん。乃至命終して大地獄に生ぜん」^上。仁王經の文の如くんば、仏法を以て先づ国王に付嘱し、次に四衆に及ぼす。王位に居る君、国を治むる臣は仏法を以て先と為して国を治むべきなり。大集經の文の如くんば、王臣等仏道の為に無量劫の間、頭目等の施を施し八万の戒行を持ち無量の仏法を学ぶと雖も、国に流布する所の法の邪正を直さざれば、国中に大風・旱魃・大雨の三災起こりて万民を逃脱せしめ、王臣定めて三惡に墮せん。亦双林最後の涅槃經第三に云はく「今正法を以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付嘱す。乃至法を護らざる者をば禿居士と名づく」と。又云はく「善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せず、応に刀劍・弓箭・鉾槩を持すべし」と。又云はく「五戒を受けざれども正法を護るを為て乃ち大乘と名づく。正法を護る者は当に刀劍器杖を執持すべし」云云。四十余年の内にも梵網等の戒の如くんば国王・大臣・諸人等、一切刀杖・弓箭・矛斧・鬪戰の具を蓄ふることを得ず。若し此を蓄ふる者は定めて現身に国王の位、比丘比丘尼の位を失ひ、後生は三惡道の中に墮すべしと定め了んぬ。而るに今の世は道俗を扱はず弓箭・刀杖を帶せり。梵網經の文の如くんば必ず三惡道に墮せんこと疑ひ無き者なり。涅槃經の文無くんば如何にしてか之を救はん。亦涅槃經の先後の文の如くんば、弓箭・刀杖を帶して惡法の比丘を治し正法の比丘を守護せん者は、先世の四重・五逆を滅して必ず無上道を証せんと定めたまふ。亦金光明經第六に云はく「若し人有つて其の国土に於て此の經有りとも雖も、未だ曾て流布せしめず、捨離の心を生じ聽聞を樂はず、亦供養し尊重し讚歎せず、四部の衆、持經の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能はず、遂に我等及び余の眷屬無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流れを失ひ、威光及び勢力有ること無からしめ、惡趣を増長し人天を損滅し生死の河

に墮ちて涅槃の路に乖かん。世尊、我等四王並びに諸の眷属及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨て、擁護の心無けん。但我等のみ是の王を捨棄するに非ず、亦無量の国土を守護する諸天善神有らんも皆悉く捨去せん。既に捨離し已はりなば其の国当に種々の災禍有つて国位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無けん。唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有りて互ひに相讒詔し枉げて辜無きに及ばん。疾疫流行し、彗星数出で、兩日並び現じ、薄蝕恒無く、黑白の二虹不祥の相を表はし、星流れ地動じ、井の内に声を發し、暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭ひて苗実も成らず、多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地として可樂の処有ること無けん」^上。此の經文を見るに、世間の安穩を祈らんに而も国に三災起こらば惡法流布する故なりと知るべし。而るに当世は随分国土の安穩を祈ると雖も、去ぬる正嘉元年には大地大いに動じ、同二年に大雨大風苗実を失へり。定めて国を喪すの惡法此の国に有るかと勘ふるなり。選択集の或る段に云はく「第一に読誦雜行とは、上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小顯密の諸經に於て受持読誦するを悉く読誦雜行と名づく」と書き了へて、次に書して云はく「次に二行の得失を判ぜば、法華・真言等の雜行は失、淨土の三部經は得なり」と。次下に善導和尚の往生禮讚の十即十生・百即百生・千中無一の文を書き載せて云はく「私に云はく、此の文を見るに彌須く雜を捨て、專を修すべし。豈百即百生の專修正行を捨て、堅く千中無一の雜修雜行を執せんや。行者能く之を思量せよ」^上。此等の文を見るに世間の道俗豈諸經を信ずべけんや。次下に亦書して法華經等の雜行と念仏の正行との勝劣難易を定めて云はく「一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣の義とは、念仏は是勝、余行は是劣。次に難易の義とは、念仏は修し易く諸行は修し難し」と。亦次下に法華・真言等の失を定めて云はく「故に知んぬ、諸行は機に非ず時を失ふ。念仏往生のみ機に当たり時を得たり」と。亦次下に法華・真言等の雜行の門を閉じて云はく「隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後は還りて定散の門を閉ず。一たび開きて以後永く閉じざるは唯是念仏の一門なり」^上。最後の本懷に云はく「夫速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に且く聖道門を闔いて撰んで淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中に且く諸の雜行を抛ちて撰んで応に正行に歸すべし」^上。門弟此の書を伝へて日本六十余州に充滿するが故に、門人世間の無智の者に語りて云はく「上人智慧第一の身と為て此の書を造り真實の義を定め、法華・真言の門を閉じて後に開くの文無く、抛ちて後に還りて取るの文無し」等と立つる間、世間の道俗一同に頭を傾け、其の義を訪ふ者には仮字を以て選択の意を宣べ、或は法然上人の物語を書す間、法華・真言に於て難を付けて或は去年の曆祖父の履に譬へ、或は法華經を読むは管絃より劣ると。是くの如き惡書国中に充滿するが故に、法華・真言等国に在りと雖も聴聞せんことを樂はず、偶行ずる人有りと雖も尊重を生ぜず、一向念仏者、法華等の結縁を作すをば往生の障りと成ると云

ふ、故に捨離しゃりの意を生ず。此の故に諸天妙法を聞くことを得ず。法味を嘗めざれば威光な勢力せいりき有ること無く、四天王並びに眷属けんぞく此の国を捨て、日本国守護の善神も捨離おし已はんぬ。故に正嘉元年しょうかに大地大いに震ふるひ、同二年に春の大雨に苗を失ひ、夏の大旱魃に草木を枯らし、秋の大風に果実を失ひ、飢渴忽けち起かちこりて万民を逃脱ちんこうみょうせしむること金光明経の文の如し。豈とが選択集の失に非ずや。仏語虚しからざる故に悪法の流布有りて既に国に三災起これり。而るに此の悪義を対治せずんば仏の所説の三悪を脱るべけんや。而るに近年より予我不愛身命がふあいしんみょうたんじやくむじょうどう但惜無上道みの文を瞻る間、雪山・常啼の心を起こし命を大乘の流布に替ごうごんへ強言を吐いて云はく、選択集を信じて後世を願はん人は無間地獄むけんじごくに墮すべしと。爾の時に法然上人の門弟選択集に於て上に出だす所の悪義を隠し、或は諸行往生を立て、或は選択集に於て法華・真言等を破せざる由を称し、或は在俗に於て選択集の邪義を知らしめざらんが為もうごに妄語を構へて云はく、日蓮は念仏となを称ふる人を三悪道に墮すと云ふと。問うて云はく、法然上人の門弟諸行往生を立つるに失有りや否や。答へて曰く、法然上人の門弟と称し諸行往生ぎやくろかやだを立つるは逆路伽耶陀の者なり。当世も亦諸行往生の義を立つ。而も内心には一向に念仏往生の義を存し、外には諸行不謗の由を聞かしむるなり。抑そもそも此の義を立つる者は選択集の法華・真言等に於て失を付け、捨閉閣拋・群賊・邪見・悪見・邪雑人・千中無一等の語を見ざるや否や。

第二に正しく謗法の人の王地に処するを対治すべき証文を出ださば、涅槃経第三に云はく「懈怠けだいにして戒を破し正法を毀る者をば王者・大臣・四部の衆、当に苦治すべし。善男子是の諸の国王及び四部の衆は当に罪まさ有りや不いなや。不なり、世尊。善男子是の諸の国王及び四部の衆は尚罪有ること無し」と。又第十二に云はく「我往昔おもを念えんふに、閻浮提に於て大国の王と作りて名を仙予と曰ひき。大乘經典を愛念し敬重し、其の心純善にしてそあくしつりん僣惡・嫉恚有ること無かりき。乃至善男子、我爾の時に於て心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已はりて即時に其の命根を断じき。善男子是の因縁を以て是より已来地獄に墮せず」已上。

問うて云はく、梵網経の文を見るに比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪なり。而るに源空げんくうが謗法の失を顕あにはすは豈阿鼻の業に非ずや。答へて云はく、涅槃経の文に云はく「迦葉菩薩世尊に言さく、如来何が故ぞ彼当に阿鼻地獄に墮すべしと記するや。善男子善星比丘は多く眷属ぜんしょう有り。皆善星は是阿羅漢あらかんなり是道果を得しと謂へり。我彼が悪邪の心やぶを壊らんと欲するが故に、彼の善星は放逸ほういつを以ての故に地獄に墮せりと記す」已上。此の文に放逸とは謗法の名なり。源空も亦彼の善星の如く、謗法を以ての故に無間むけんに墮すべし。所化の衆此の邪義を知らざるが故に源空を以て一切智人と号し、或は勢至菩薩或は善導けしんの化身なりと云ふ。彼が悪邪の心やぶを壊らんが為の故に謗法の根源を顕はす。梵網経の説は謗法の者の外の四衆なり。仏誡めて云はく「謗法の人を見て其の失を顕はさざれば仏弟子に非ず」と。故に涅槃経に云はく「我涅槃の後其の方面に随ひ持戒の比丘

有りて威儀具足し正法を護持せば、法を壊る者を見て即ち能く駟遣し呵責し徴治せよ。当に知るべし、是の人は福を得んこと無量にして称計すべからず」と。亦云はく「若し善比丘有って法を壊る者を見て置いて呵責し駟遣し挙処せずんば、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨なり。若し能く駟遣し呵責し挙処せば是我が弟子真の声聞なり」^上。予仏弟子の一分に入らんが為に此の書を造り謗法の失を顕はし世間に流布す。願はくは十方の仏陀此の書に於て力を副へ大悪法の流布を止め一切衆生の謗法を救はしめ給へ。

大文の第五に善知識並びに真実の法に値ひ難きことを明かさば、之に付いて三有り。一には受け難き人身値ひ難き仏法なることを明かし、二には受け難き人身を受け値ひ難き仏法に値ふと雖も悪知識に値ふが故に三悪道に墮することを明かし、三には正しく末代の凡夫の為の善知識を明かす。

第一に受け難き人身値ひ難き仏法なることを明かさば、涅槃經三十三に云はく「爾の時に世尊地の少土を取りて之を爪上に置き迦葉に告げて言はく、是の土多きやと、十方世界の地の土多きやと。迦葉菩薩仏に白して言さく、世尊、爪上の土は十方所有の土に比せざるなりと。善男子、人有りて身を捨てて還つて人身を得、三悪の身を捨てて人身を受くることを得。諸根完く具して中国に生じ、正信を具足して能く道を修習し、道を修習し已はって能く正道を修し、正道を修し已はって能く解脱を得、解脱を得已はって能く涅槃に入るは爪上の土の如く、人身を捨てて已はって三悪の身を捨てて三悪の身を捨て、諸根具せずして辺地に生じ、邪倒の見を信じて邪道を修習し、解脱常樂の涅槃を得ざるは十方界所有の地の土の如し」^上。此の文は多く法門を集めて一具と為せり。人身を捨てて還つて人身を受くるは爪上の土の如く、人身を捨てて三悪道に墮つるは十方の土の如し。三悪の身を捨てて人身を受くるは爪上の土の如く、三悪の身を捨てて還つて三悪の身を得るは十方の土の如し。人身を受くるは十方の土の如く、人身を受けて六根欠けざるは爪上の土の如し。人身を受けて六根欠けざれども辺地に生ずるは十方の土の如く、中国に生ずるは爪上の土の如し。中国に生ずるは十方の土の如く、仏法に値ふは爪上の土の如し。又云はく「一闍提と作らず、善根を断ぜず、是くの如き等の涅槃經典を信ずるは爪上の土の如く、乃至一闍提と作り、諸の善根を断じ、是の經を信ぜざるは十方界所有の地の土の如し」^上。此の文の如くんば法華・涅槃を信ぜずして一闍提と作るは十方の土の如く、法華・涅槃を信ずるは爪上の土の如し。此の經文を見て 彌感涙押さへ難し。今日本国の諸人を見聞するに多分は權教を行ず。設ひ身口には実教を行ずと雖も心には亦權教を存す。故に天台大師摩訶止觀の五に云はく「其の癡鈍なる者は毒氣深く入って本心を失ふが故に、既に其れ信ぜざるは則ち手に入らず、乃至大罪聚の人なり。乃至設ひ世を厭ふ者も下劣の乗を翫び枝葉に攀附し、狗の作務に狎れ、獼猴を敬ふて帝釈と為し、瓦礫を崇んで明珠なりとす。此の黒闇の人豈道を論ずべけんや」^上。源空並びに所化の衆深く三毒の酒に酔ふて大通結縁の本

心を失ふ。法華・涅槃に於て不信の思ひを作し一闡提と作り、觀經等の下劣の乘に依つて方便しょうみやう称名等の瓦礫もてあそを翫あそび、法然房の彌猴を敬ふて智慧第一の帝釈と思ひ、法華・涅槃の如意珠を捨て、如来の聖教を偏するは権実二教を弁へざるが故なり。故に弘決の第一に云はく「此の円頓えんどんを聞いて宗重そうじゆうせざる者は良まことに近代大乘を習ふ者の雜濫ぞうらんに由るが故なり」と。大乘に於て権実二教を弁へざるを雜濫と云ふなり。故に末代に於て法華經を信ずる者は爪上の土の如く、法華經を信ぜずして權教に墮落する者は十方の微塵の如し。故に妙樂歎いて云はく「像末こころうすは情澆かほくく信心寡薄えんどんにして円頓の教法藏くらに溢れ函あふに盈つれども暫くも思惟しゆいせず。便すなわち目を瞑ぐに至る。徒ふさに生じ徒に死す。一に何ぞ痛ましきかな」^上。此の釈は偏に妙樂大師權者たるの間、遠く日本国の当代を鑑かんがみて記し置く所の未来記なり。問うて云はく、法然上人の門弟の内にも一切經藏を安置し法華經を行ずる者有り。何ぞ皆謗法の者と称せんや。答へて曰く、一切經を開き見て法華經を読むは、難行道の由を称し選択集の惡義を扶けんが為なり。經論を開くに付いて彌謗法を増すこと例せば善星ぜんじゆうの十二部經・提婆達多の六万藏の如し。智者の由を称するは自身を重んじ惡法を扶けんが為なり。

第二に受け難き人身を受け値ひ難き仏法に値ふと雖も惡知識に値ふが故に三惡道に墮することを明かさば、仏藏經に云はく「大莊嚴だいじゆうごんぶつの滅後に五比丘あり。一人は正道を知つて多億の人を度し、四人は邪見に住す。此の四人命終して後阿鼻地獄みやうじゆうに墮つ。仰ぎ臥しうつぶ伏せに臥し左脇さききゆうに臥し右脇うききゆうに臥すこと各々九百万億歳なり。乃至若しは在家出家の此の人に親近せしもの、並びに諸の檀越だんのつおよ凡そ六百四万億人あり。此の四師と俱に生じ俱に死して、大地獄に在つて諸の燒煮しょうしやを受く。大劫若し尽きぬれば是の四惡人及び六百四万億の人此の阿鼻地獄より他方の大地獄の中に転生てんじゆうす」^上。涅槃經三十三に云はく「爾の時に城中に一の尼乾にけん有り。名を苦得くどくと曰ふ。乃至善星、苦得に問ふ。答へて曰く、我食吐鬼じきときの身を得。善星諦あきらかに聞け。乃至爾の時に善星即ち我が所もとに還つて是くの如き言を作す、世尊、苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜん。乃至爾の時に如来即ち迦葉かじゆうと善星の所に往きたまふ。善星比丘遙かに我來たるを見、見已はつて即ち惡邪の心を生ず。惡心を以ての故に生身おに陥ち入つて阿鼻地獄に墮す」^上。善星比丘は仏の菩薩たりし時の子みこなり。仏に随ひ奉り出家して十二部經を受け、欲界の煩惱ぼんのうを壊りて四禪定ぜんじゆうを獲得せり。然りと雖も惡知識たる苦得外道に値ひ、仏法の正義を信ぜざるに依つて出家の受戒・十二部經の功德を失ひ、生身に阿鼻地獄に墮す。苦岸等の四比丘しんごんに親近せし六百四万億の人は四師と俱に十方の大阿鼻地獄を經しなり。今の世の道俗は選択集を貴ぶが故に、源空の影像を拝して一切經難行の邪義を読む。例せば尼乾の所化の弟子が尼乾の遺骨らいを礼して三惡道に墮せしが如し。願はくは今の世の道俗選択集の邪正を知りて後に供養恭敬くぎやうを致せ。爾しからずんば定めて後悔有らん。故に涅槃經に云はく「菩薩摩訶薩まかさつ惡象等に於ては心に怖畏すること無かれ。惡知識に於ては怖畏の心を生ぜ

よ。何を以ての故に。是の悪象等は唯能く身を壊りて心を壊ること能はず、悪知識は二俱に壊るが故に。是の悪象等は唯一身を壊り、悪知識は無量の善身無量の善心を壊る。是の悪象等は唯能く不浄の臭き身を破壊し、悪知識は能く浄身及び浄心を壊る。是の悪象等は能く肉身を壊り、悪知識は法身を壊る。悪象の為に殺されては三趣に至らず、悪友の為に殺されては必ず三趣に至る。是の悪象等は但身の怨と為る、悪知識は善法の怨と為らん。是の故に菩薩常に当に諸の悪知識を遠離すべし」^上。

請ひ願はくは今の世の道俗、設ひ此の書を邪義なりと思ふと雖も且く此の念を抛ちて十住毘婆沙論を開き、其の難行の内に法華經の入不入を検へ、選択集の「準之思之」の四字を按じて後に是非を致せ。謬りて悪知識を信じ邪法を習ひ此の生を空しうすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の為の善知識を明かさば、問うて云はく、善財童子は五十余の知識に値ひき。其の中に普賢・文殊・観音・弥勒等有り。常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子・夫人に値ひ奉りて生死を離れたり。此等は皆大聖なり。仏世を去りての後是くの如きの師を得ること難しと為す。滅後に於て亦竜樹・天親も去りぬ。南岳・天台にも値はず。如何ぞ生死を離るべきや。答へて曰く、末代に於て真実の善知識有り。所謂法華・涅槃是なり。問うて云はく、人を以て善知識と為すは常の習ひなり。法を以て知識と為すの証有りや。答へて云はく、人を以て知識と為すは常の習ひなり。然りと雖も末代に於ては真の知識無ければ法を以て知識と為すに多くの証有り。摩訶止観に云はく「或は知識に従ひ、或は經卷に従ひて、上に説く所の一実の菩提を聞く」^上。此の文の意は經卷を以て善知識と為すなり。法華經に云はく「若し法華經を閻浮提に行じ受持すること有らん者は應に此の念を作すべし。皆是普賢威神の力なり」^上。此の文の意は末代の凡夫法華經を信ずるは普賢の善知識の力なり。又云はく「若し是の法華經を受持し読誦し正憶念し修習し書写すること有らん者は、当に知るべし、是の人は則ち釈迦牟尼仏を見るなり。仏口より此の經典を聞くが如し。当に知るべし、是の人は釈迦牟尼仏を供養するなり」^上。此の文を見るに法華經は釈迦牟尼仏なり。法華經を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り、此の經を信ずる者の前には滅後たりと雖も仏の在世なり。又云はく「若し我成仏して滅度の後、十方の国土に於て法華經を説く所有らば、我が塔廟是の經を聴かんが為の故に其の前に涌現して為に証明を作さん」^上。此の文の意は我等法華の名号を唱へば多宝如来本願の故に必ず来たりたまふ。又云はく「諸仏の十方世界に在って法を説くを尽く還して一处に集めたまふ」^上。釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等は我等が善知識なり。若し此の義に依らば我等も亦宿善・善財・常啼・班足等にも勝れたり。彼は権經の知識に値ひ、我等は実經の知識に値へばなり。彼は権經の菩薩に値ひ、我等は実經の仏菩薩に値ひ奉ればなり。涅槃經に云はく「法に依って人に依らざれ、智に依って識に依らざれ」^上。依法

と云ふは法華・涅槃の常住の法なり。不依人とは法華・涅槃に依らざる人なり。設ひ仏菩薩たりと雖も法華・涅槃に依らざる仏菩薩は善知識に非ず。況んや法華・涅槃に依らざる論師・訳者・人師に於てをや。依智とは仏に依る。不依識とは等覺已下なり。今の世の世間の道俗源空の謗法の失を隠さんが為に徳を天下に挙げて権化なりと称す。依用すべからず。外道は五通を得て能く山を傾け海を竭くすとも神通無き阿含經の凡夫に及ばず。羅漢を得六通を現ずる二乗は華嚴・方等・般若の凡夫に及ばず。華嚴・方等・般若の等覺の菩薩も法華經の名字・觀行の凡夫に及ばず。設ひ神通智慧有りと雖も權教の善知識をば用ふべからず。我等常没の一闡提の凡夫法華經を信ぜんと欲するは仏性を顯はさんが為の先表なり。故に妙樂大師の云はく「内薰に非ざるよりは何ぞ能く悟りを生ぜん。故に知んぬ、悟りを生ずる力は真如に在り、故に冥薰を以て外護と為すなり」^上。法華經より外の四十余年の諸經には十界互具無し。十界互具を説かざれば内心の仏界を知らず。内心の仏界を知らざれば外の諸仏も顯はれず。故に四十余年の權行者の者は仏を見ず。設ひ仏を見ると雖も他仏を見るなり。二乗は自仏を見ざるが故に成仏無し。爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば二乗界の成仏を見ず。故に衆生無辺誓願度の願も満足せず。故に菩薩も仏を見ず、凡夫も亦十界互具を知らざるが故に自身の仏界顯はれず。故に阿彌陀如来の來迎も無く、諸仏如来の加護も無し。譬へば盲人の自身の影を見ざるが如し。今法華經に至りて九界の仏界を開くが故に、四十余年の菩薩・二乗・六凡始めて自身の仏界を見る。此の時此の人の前に始めて仏・菩薩・二乗を立つ。此の時に二乗・菩薩始めて成仏し凡夫始めて往生す。是の故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經是なり。常途の天台宗の学者は爾前に於て当分の得道を許せども、自義に於ては猶当分の得道を許さず。然りと雖も此の書に於ては其の義を尽さず、略して之を記す。追つて之を記すべし。

大文の第六に法華・涅槃に依る行者の用心を明かさば、一代教門の勝劣・淺深・難易等に於ては先の段に既に之を出だす。此の一段に於ては一向に後世を念ふ末代常没の五逆・謗法・一闡提等の愚人の為に之を注す。略して三有り。一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離るべく、惡法を持つに依つて三惡道に墮することを明かし、二には但法華經の名字計りを唱へて三惡道を離るべきことを明かし、三には涅槃經は法華經の為の流通と成ることを明かす。

第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離るべく、惡法を持つに依つて三惡道に墮することを明かさば、涅槃經第三に云はく「仏迦葉に告げ給はく、能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛の身を成就することを得たり」と。亦云はく「時に國王有り、名を有徳と曰ふ。乃至法を護らんが為の故に、乃至是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戦闘す。乃至王是の時に於て法を聞くことを得已はつて心大に歡喜し尋いで即ち命終して阿闍仏の國に生ず」^上。此の文の如くんば在家の諸人別の智行無しと

雖も、謗法の者を対治する功德に依って生死を離るべきなり。問うて云はく、在家の諸人ようい かん 仏法を護持すべき様如何。答へて曰く、涅槃經に云はく「若し衆生ざいもつ とんじやく 有って財物に貪著せば、我当まさ に財を施して然して後に是の大涅槃經を以て之を勸めて讀ましむべし。乃至先に愛語を以て而も其の意に随ひ、然して後に漸ようや く当に是の大乗大涅槃經を以て之を勸めて讀ましむべし。若し凡庶ぼんしよ の者には当に威勢を以て之せま に逼りて讀ましむべし。若し、僞慢きょうまん の者には我当まさ に其れが為に而も僕使と作り其の意に随順し其れをして歡喜せしむべし。然して後に復また 當に大涅槃を以て而も之を教導きやうどう すべし。若し大乘經を誹謗する者有らば、當に勢力を以て之を摧くじ きて伏せしめ、既に摧伏すで さいふく し已はって然して後に勸めて大涅槃を讀ましむべし。若し大乘經を愛樂あいぎやう する者有らば、我躬みづか ら當に往いて恭敬くぎやう し供養そんじゆう し尊重さんだん し讚歎すべし」巳。問うて云はく、今の世の道俗偏ひとえ に選択集に執して、法華・涅槃に於ては自身不相応の念を作すの間護ご しゃくこんりゆう 惜建立の心無し。偶 邪義の由を称する人有れば念仏誹謗者と称し、悪名を天下に雨らす。斯等は如何。答へて曰く、自答を存すべきに非ず。仏自ら此の事を記して云はく、仁王經に云はく「大王我が滅度の後未來世の中の四部の弟子・諸の小国の王・太子・王子、乃すなわ ち是住持して三宝を護らん者うたた 轉更に三宝を滅破せんこと師子の身中の虫の自ら師子を食らふが如くならん。外道に非ざるなり。多く我が仏法を破り、大罪過を得ん、正教衰薄し、民に正行無く、漸ようや く悪を為すを以て其の寿日いのち に減じて百歳に至らん。人仏教を壊らば復また 孝子無く、六親不和にして天神も祐たす けず。疾疫しつえきあつ 悪鬼日に來たりて侵害し、災怪首尾し、連禍縦横し、死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」と。亦次下に云はく「大王、未來世の中の諸の小国の王・四部の弟子自ら此の罪を作るは破国の因縁なり。乃至諸の悪比丘みょうり 多く名利を求め、国王太子王子の前に於て自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。其の王わきま 別へずして此の語を信聴し乃至其の時に当たりて正法將に滅せんとして久しからず」巳。余選択集を見るに敢へて此の文の未來記たが に違はず。選択集は法華・真言等の正法を定めて雜行難行と云ひ、末代の我等に於ては時機相応せず、之を行ずる者は千が中に一も無く、仏還つて法華等を説きたまふと雖も法華・真言の諸行の門を閉じて念仏の一門を開く。末代に於て之を行ずる者は群賊等と定め、当世の一切の道俗に於て此の書を信ぜしめ、此の義を以て如来の金言と思へり。此の故に世間の道俗仏法建立の意無く、法華真言の正法の法水忽たちま ちに竭き、天人減少して三悪日に増長す。偏ひとえ に選択集の悪法に催もよ されて起こす所の邪見なり。此の經文に仏記して我滅度後と云へるは、正法の末八十年、像法の末八百年、末法の末八千年なり。選択集の出でたる時は像法の末、末法の始めなれば八百年の内なり。仁王經に記す所の時節に当たれり。「諸小国王」とは日本国の王なり。「中下品善ぞくさんおう」は粟散王是なり。「如師子身中虫」とは仏弟子の源空是なり。「諸悪比丘」とは所化の衆是なり。「説破仏法因縁破国因縁」とは上に挙ぐる所の選択集の語是なり。「其王不別信聴比語」とは今の世の道俗邪義をわきま 弁みだ へずして猥りに之これ を信ずるなり。請

ひ願はくは道俗法じやしやうの邪正を分別して其の後正法に付いて後世を願へ。今度人身を失ひ三悪道に墮して後に後悔すとも何ぞ及ばん。

第二に但法華經の題目計りぼかを唱へて三悪道を離るべきことを明かさば、法華經の第五に云はく「文殊師利もんじゆしり、是の法華經は無量の国の中に於て乃至名字みやうじをも聞くことを得べからず」と。第八に云はく「汝等但能く法華の名を受持せん者なんだちよみなを擁護せんすら福量おうごるべからず」と。提婆品だいぼほんに云はく「妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮せず」と。大般涅槃經名字功德品だいぱんねほんに云はく「若し善男子・善女人有つて是の經の名を聞いて悪趣あくしゆに生ずといふは是の処ことわり有ること無けん」と。涅槃經は法華經の流通りゆうつうたるが故に之を引く。問うて云はく、但法華經の題目を聞くと雖も解心げしん無くば如何にして三悪趣を脱れんや。答へて云はく、法華經流布の国に生れて此の經の題名を聞き、信を生ずるは宿善しゆくぜんの深厚じんこうなるに依れり。設ひ今生は悪人無智たなりと雖も必ず過去の宿善有るが故に、此の經の名を聞いて信を致す者なり。故に悪道に墮せず。問うて云はく、過去の宿善とは如何。答へて曰く、法華經の第二に云はく「若し此の經法を信受すること有らん者は是の人は已に曾て過去の仏を見奉り恭敬くぎやうし供養し亦是の法を聞けるなり」と。法師品ほふしほんに云はく「又如來滅度の後、若し人有つて妙法華經の乃至一偈一句いちげを聞いて一念も随喜せん者は、乃至当に知るべし、是の諸人等已に曾て十万億の仏を供養せしなり」と。流通たる涅槃經に云はく「若し衆生有つて熙連河沙等の諸仏に於て菩提心おを發こし、乃ち能く是の悪世すなわに於て是くの如き經典を受持して誹謗を生ぜず。善男子、若し能く一恒河沙等の諸仏世尊に於て菩提心ごうがしやを發こすこと有つて、然して後に乃ち能く悪世の中に於て是の法ぼうを謗ぜず是の典あいぎやうを愛敬これらせん」已上こ經文。此等の文の如くんば、設ひ先げしんに解心無くとも此の法華經を聞いて謗ぜざるは大善しよしやうの所生それなり。夫三悪の生を受くること大地あ微塵より多く、人間の生を受くること爪上の土より少なし。乃至四十余年の諸經に値ふは大地微塵より多く、法華・涅槃に値ふことは爪上の土より少なし。上に挙ぐる所の涅槃經の三十三の文を見るべし。設ひ一字一句なりと雖も此の經を信ずるは宿縁多幸しゆくえんたこうなり。

問うて云はく、設ひ法華經を信ずると雖も悪縁に随はゞ何ぞ三悪道に墮せざらんや。答へて曰く、解心げしん無き者あ権教の悪知識あに遇ひて実教を退せば、悪師を信ずる失とがに依つて必ず三悪道に墮すべきなり。彼の不輕ふきやうきやう輕毀きんにんの衆は権人なり。大通結縁だいつうけちえんの者の三千塵点を歴しは法華經を退して権教うつに遷りしが故なり。法華經を信ずるの輩法華經の信を捨て、権人ほかに随はんより外は、世間の悪業に於ては法華の功德に及ばず。故に三悪道に墮すべからざるなり。

問うて云はく、日本国は法華・涅槃有縁うえんの地いななりや否や。答へて云はく、法華經第八に云はく「如來の滅後に於て閻浮提えんぶだいの内に広く流布せしめ断絶せざらしむ」と。七の巻に云はく「広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」と。涅槃經第九に云は

く「此の大乗經典大涅槃經も亦復是くの如し。南方の諸の菩薩の為の故に当に広く流布すべし」^{已上}經文。三千世界広しと雖も^{みづか}仏自ら法華・涅槃を以て南方流布の処と定む。南方の諸国の中に於ては日本国は^{こと}殊に法華經の流布すべき処なり。問うて云はく、其の証如何。答へて曰く、^{じょうこう}肇公の^{ほんぎょう}法華の^{らじゅうさんぞう}翻經の後記に云はく「^{しゅりやそま}羅什三蔵、^{ぶつにち}須利耶蘇摩三蔵に値ひ奉りて法華經を授かる時の語に云はく、^{いよう}仏日西山に^{こてん}隠れ遺耀東北を照らす。茲の典東北の諸国に有縁なり。汝慎んで^{でんぐ}伝弘せよ」^上。東北とは日本なり。西南の^{てんじく}天竺より東北の日本を指すなり。故に^{えしん}慧心の^{いちじょうようけつ}一乗要決に云はく「^{えんき}日本一州円機純一にして、^{ちようや}朝野^{おんごん}遠近同じく一乗に帰し、^{しそきせん}緇素貴賤悉く成仏を期す」^上。願はくは日本国の今世の道俗選^{くじゅう}択集の久習を捨て、^{げんもん}法華涅槃の現文に依り、^{じょうこう}肇公・^{えしん}慧心の日本記を^{たの}恃みて法華修行の安心を企てよ。

問うて云はく、法華經修行の者何れの^{いず}淨土を期すべきや。答へて曰く、法華經二十八品の肝心たる^{いず}壽量品に云はく「我常在此娑婆世界」と。亦云はく「我常住於此」と。亦云はく「我此土安穩」文。此の文の如くんば^{くじょう}本地久成の^{えんぶつ}円仏は此の世界に^{いま}在せり。此の^ど土を捨て、何れの土を願ふべきや。故に法華經修行の者の所住の処を淨土と思うべし。何ぞ^{わずら}煩はしく他処を求めんや。故に^{じんりきほん}神力品に云はく「若しは^{じゅげ}經卷所住の処ならば、若しは園中に於ても、若しは林中に於ても、若しは樹下に於ても、若しは僧坊に於ても、若しは^{びやくえ}白衣の舎にても、若しは^{せんごくこうや}殿堂に在っても、若しは山谷曠野にても、乃至当に知るべし、是の処は即ち是道場なり」と。涅槃經に云はく「若し^{みみょう}善男子、是の大涅槃微妙の經典流布せらるゝ^{こんごう}処は当に知るべし、其の地即ち是金剛なり。是の中の諸人も亦金剛の如し」^上。法華涅槃を信ずる行者は余処を求むべきに非ず。此の經を信ずる人の所住の処は即ち淨土なり。

問うて云はく、^{けごん}華嚴・^{ほうどう}方等・^{はんにや}般若・^{あごん}阿含・^{かんぎょう}觀經等の諸經を見るに^{とそつ}兜卒・^{さいほう}西方・^{すす}十方の淨土を勧む。其の上法華經の文を見るに亦^{また}兜卒・西方・十方の淨土を勧む。何ぞ此等の文に違して但此の^{がりやくけいきよく}瓦礫荆棘の^{えど}穢土を勧むるや。答へて曰く、爾前の淨土は^{くおんじつじょう}久遠実成の^{おわ}釈迦如来の所現の淨土にして實には皆穢土なり。法華經は亦方便壽量の二品なり。壽量品に至りて實の淨土を定むる時、此の土は即ち淨土なりと定め了んぬ。但し^{もち}兜卒・安養・十方の難に至りては爾前の名目を改めずして此の土に於て^{もち}兜卒・安養等の名を付く。例せば此の經に三乗の名有りと雖も三乗有らざるが如し。「更に^{もち}觀經等を指すを須ひざるなり」の^{けちえん}釈の意是なり。法華經に^{がりやく}結縁無き衆生の当世西方淨土を願ふは^{ねが}瓦礫の土を^{ぶんでん}樂ふとは是なり。法華經を信ぜざる衆生は誠に^{ぶんてん}分添の淨土無き者なり。

第三に涅槃經は法華經流通の為に之を説きたまふを明かさば、問うて云はく、^{こうたく}光宅の^{ほううん}法雲法師並びに^{えかん}道場の^{せきとく}慧觀等の^{むじょう}碩徳は法華經を以て^{じゆくそみ}第四時の經と定め無常・^{ごんげ}熟蘇味と立つ。天台智者大師は法華涅槃同味と立つると雖も亦^{くんじゅう}拈捨の義を存す。二師共に^{ごんげ}権化なり。互ひに^{めいしん}徳行を具せり。何れを正と為して我等の迷心を晴らすべきや。答へて曰く、

設たとひ論師い訳者わたりと雖もい仏教いに違いしてい權實い二教いを判いぜずいんばい且いく疑いひをい加いふいべし。何いに
 況いんやい唐土いの人い師いたるい天台い・南岳い・光宅い・慧觀い・智儼い・嘉祥い・善導い等のい積いにい於いていをいや。
 設たとひ末代いのい学者いたりと雖もい依法い不依い人いのい義いをい存いし、本經い本論いに違いはずいんばい信用いをい加いふいべ
 し。問いうてい云いはく、涅槃經いの第十四卷いを開いきたるいに、五十年いの諸大乘經いをい挙いげてい前四味い
 に譬たとへ、涅槃經いを以いて醜翻味いに譬たとふ。諸大乘經いは涅槃經いより劣いること百千万倍いと定めい了
 んぬ。其の上迦葉童子いの領解いに云いはく「我今日いより始めてい正見いを得い。此より前いの我等い、
 悉いく邪見いの人いと名いづく」と。此の文いの意いは涅槃經い已前いの法華等いの一切衆典いを皆い邪見いと云
 ふなり。当いに知いるべし、法華經いは邪見いの經いにして未いだ正見いのい佛性いを明いかさず。故いに天親い
 菩薩いの涅槃論いに諸經いと涅槃いとの勝劣いを定いむる時い、法華經いを以いて般若經いに同いじて同いじく第
 四時いに撰いしたり。豈い正見いの涅槃經いを以いて邪見いの法華經いの流通いと為いさんや如何い。答いへて曰い
 く、法華經いの現文いを見るいに佛の本懷い残いすこと無し。方便品いに云いはく「今正いしく是其いの時
 なり」と。寿量品いに云いはく「毎いに自ら是いの念いを作いさく、何を以いてか衆生いをして無上道いに
 入り、速いやかに佛身いを成就いすることを得いせしめん」と。神力品いに云いはく「要いを以いて之いを
 言いはゞ、如来いの一切いの所有いの法い、乃至い皆此いの經いに於いて宣示顯說いす」^上。此等いの現文いは釈
 迦如来いの内証いは皆此いの經いに尽いくしたまふ。其の上多宝並いびに十方いの諸佛來集いの庭いに於
 て釈迦如来いの已今当いの語いを証いし、法華經いの如いき經い無しと定めい了んぬ。而いるに多宝諸佛本
 土いに還いるの後い、但い釈迦一佛いのみ異變いを存いして、還いつて涅槃經いを説いき法華經いを卑いくせば誰
 人いか之いを信いぜん。深く此いの義いを存いぜよ。随いつて涅槃經いの第九いを見るいに、法華經いを流通いし
 て説いいて云いはく「是いの經いの世いに出いずること彼の菓實いの一切いを利益いし安樂いする所多いきが如
 し。能いく衆生いをして佛性いを見いはさしむ。法華いの中の八千いの聲聞いの記莂いを授いかることを得
 て大菓實いを成いずるが如いきは、秋い收い冬藏いして更いに所作い無いきが如いし」と。此の文いの如いくん
 ば法華經い若いし邪見いならば涅槃經いも豈い邪見いに非いずや。法華經いは大收い、涅槃經いは拈い捨いなり
 と見え了んぬ。涅槃經いは自ら法華經いに劣いるの由いを称いす。法華經いの当説いの文敢いへて相違い無
 し。但いし迦葉いの領解い並いびに第十四の文いは法華經いを下いすの文いに非いず。迦葉い自身い並いびに所
 化いの衆今始めてい法華經いの所説いの常い住佛性い・久遠實成いを覺いる。故いに我が身いを指いして此
 より已前いは邪見いなりと云いふ。法華經い已前いの無量義經いに嫌いはるゝ諸經いを涅槃經いに重ねて之
 を挙いげて嫌いふなり。法華經いを嫌いふには非いざるなり。亦い涅槃論いに至りては、此等いの論いは書
 き付くるが如いく天親菩薩いの造い、菩提流支いの訳いなり。法華論いも亦い天親菩薩いの造い、菩提流支い
 の訳いなり。經文いに違いすること之い多いし。涅槃論いも亦い本經いに違いす。当いに知いるべし、訳者いの誤
 りなり、信用いに及いばず。

問いうて云いはく、先いの教いに漏いれたる者いを後いの教いに之いを承いけ取りて得道いせしむるを流通いと
 称いせば、阿含經いは華嚴經いの流通いと成いるべきや、乃至い法華經いは前四味いの流通いと成いる可いきや
 如何い。答いへて曰いく、前四味いの諸經いは菩薩人天等いの得道いを許いすと雖も決定性いの二乘い・無
 性い・闍提いの成佛いを許いさず。其の上佛意いを探りて實いを以いて之いを檢いふるに亦い菩薩人天等いの

得道も無し。十界互具を説かざるが故に、久遠実成無きが故に。問うて云はく、証文如何。答へて云はく、法華經方便品に云はく「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば我則ち慳貪に墮せん。此の事は為めて不可なり」^上。此の文の意は今選択集の邪義を破せんが為に余事を以て詮と為さず。故に爾前得道の有無の実義は之を出ださず。追つて之を検ふべし。但し四十余年の諸經は実に凡夫の得道無きが故に法華經を爾前の流通と為さず。法華經に於て十界互具久遠実成を顯はし了んぬ。故に涅槃經は法華經の為に流通と成るなり。

大文の第七に問ひに随つて答ふとは、若し末代の愚人、上の六門に依つて万が一も法華經を信ぜば、權宗の諸人、或は自ら惑へるに依り、或は偏執に依つて法華經の行者を破せんが為に、多く四十余年並びに涅槃等の諸經を引いて之を難ぜん。而るに權教を信ずる人は之多く、或は威勢に依り、或は世間の資縁に依り、人の意に随つて世路を亘らんが為にし、或は權教には學者多く、實教には智者少なし。是非に就いて万が一も實教を信ずる者有るべからず。是の故に此の一段を撰んで權人の邪難を防がん。

問うて云はく、諸宗の學者難じて云はく「華嚴經は報身如来の所説、七処八会皆頓極頓証の法門なり。法華經は応身如来の所説、教主既に優劣有り。法門に於て何ぞ浅深無からん。随つて対告衆も法慧・功德林・金剛幢等なり。永く二乗を雜へず。法華經は舍利弗等を以て対告衆と為す」^{華嚴宗の難}。法相宗の如きは解深密經等を以て依憑と為して難を加へて云はく「解深密經は文殊・觀音等を以て対告衆と為す。勝義生菩薩の領解には一代を有・空・中と詮す。其の中とは華嚴・法華・涅槃・深密等なり。法華經の信解品の五時の領解は四大声聞なり。菩薩と声聞と勝劣天地なり」と。淨土宗の如きは道理を立て、云はく「我等は法華等の諸經を誹謗するに非ず。彼等の諸經は正には大人の為、傍には凡夫の為にす。斷惑証理・理深の教にして末代の我等之を行ずるに千人の中に一人も彼の機に当たらず、在家の諸人多分は文字を見ず、亦華嚴・法相等の名を聞かず。況んや其の義を知らんや。淨土宗の意は我等凡夫は但口に任せて六字の名号を称すれば、現在には阿弥陀如来二十五の菩薩等を遣はして身に影の随ふが如く、百重千重に行者を圍繞して之を守りたまふ。故に現世には七難即滅七福即生し、乃至臨終の時は必ず來迎有りて觀音の蓮台に乘じ、須臾の間に淨土に至り、業に随つて蓮華開け、法華經を聞いて實相を覺る。何ぞ煩はしく穢土に於て余行を行じて何の詮か有る。但万事を抛ちて一向に名号を称せよ」云云。禪宗等の云はく「一代聖教は月を指す指なり。天地日月等も汝等が妄心より出でたり。十方の淨土も執心の影像なり。釈迦十方の仏陀は汝が覺心の所變なり。文字に執する者は株を守る愚人なり。我が達磨大師は文字を立てず、方便を仮らず、一代聖教の外に仏迦葉に印して此の法を伝ふ。法華經等は未だ真實を宣べず」^上。此等の諸宗の難一に非ず。如何ぞ法華經の信心を壞らざるべしや。答へて云はく、法華經の行者は心中に、四十余年・已今当・皆是真實・依

法不依人等の文を存して而も外に語に之を出ださず。難に随つて之を問ふべし。抑所^{そもそも}立の宗義何れの經に依るや。彼經を引かば引くに随つて亦之を尋ねよ。一代五十年の間の説の中に法華經より先か、後か、同時なるか、亦先後不定なるかと。若し先と答へば未^み顕^{けん}真^{しん}実^{じつ}の文を以て之を責めよ。敢^あへて彼の經の説相を尋ぬること勿^なれ。後と答へば当説の文を以て之を責めよ。同時なりと答へば今説の文を以て之を責めよ。不定と答へば不定の經は大部の經に非ず、一時一会の説にして亦物の数に非ず。其の上不定の經と雖も三説を出でず。設^たひ百^{ひゃく}千^{せん}万^{まん}の義を立つると雖も四十余年等の文を載せて虚妄と称せざるより外は用ふべからず。仏の遺言に不^ふ依^え不^ふ了^{りょう}義經と云ふが故なり。亦智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立て難^なずと雖も法華涅槃に違する人師に於ては用ふべからず。依法不依人の金言を仰ぐが故なり。

亦法華經を信ぜん愚者の為に二種の信心を立つ。一には仏に就いて信を立て、二には經に就いて信を立つ。仏に就いて信を立つとは、權宗の學者來たり難じて云はん、善導和尚は三昧發得の人師、本地は弥陀の化身なり。慈恩大師は十一面觀音の化身、亦筆端より舍利を雨らす。此等の諸人は皆彼々の經々に依つて皆証有り。何ぞ汝彼の經に依らず、亦彼の師の義を用ひざるや。答へて曰く、汝聞け。一切の權宗の大師先徳並びに舍利弗・目連・普賢・文殊・觀音乃至阿弥陀・藥師・釈迦如来、我等の前に集りて説いて云はん、法華經は汝等の機に叶はず、念仏等の權經の行を修して往生を遂げて後に法華經を覺れと。是くの如き説を聞くと雖も敢へて用ふべからず。其の故は四十余年の諸經には法華經の名字を呼ばず、何れの処にか機の堪不堪を論ぜん。法華經於ては多宝・釈迦・十方諸仏、一処に集まりて撰定して云はく「法をして久しく住せしむ」「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ」と。此の外に今仏出来して法華經を末代不相応と定めば既に法華經に違す。知んぬ、此の仏は涅槃經に出だす所の滅後の魔^まなり。之を信用すべからず。其の已下の菩薩・声聞・比丘等は亦言論するに及ばず。此等は不審も無し。涅槃經に記す所の滅後の魔の所變の菩薩等なり。其の故は法華經の座は三千大千世界の外四百万億阿僧祇の世界なり。其の中に充滿せる菩薩・二乘・人天・八部等皆如来の告勅を蒙り、各々所在の国土に法華經を弘むべきの由之を願ひぬ。善導等若し權者ならば何ぞ竜樹・天親等の如く權教を弘めて後に法華經を弘めざるや、法華經の告勅の数に入らざるや、何ぞ仏の如く權教を弘めて後に法華經を弘めざるや。若し此の義無くんば設^たひ仏たりと雖も之を信ずべからず。今は法華經の中の仏を信ず、故に仏に就いて信を立つと云ふなり。

問うて云はく、釈迦如来の所説を他仏之を証するを實説と稱せば何ぞ阿弥陀經を信ぜざるや。答へて云はく、阿弥陀經に於ては法華經の如き証明無きが故に之を信ぜず。問うて云はく、阿弥陀經を見るに、釈迦如来の所説の一日七日の念仏を六万の諸仏舌を出だし三千を覆ふて之を証明せり。何ぞ証明無しと云ふや。答へて云はく、阿弥陀經に於ては全く法華經の如き証明無し。但釈迦一仏舍利弗に向かつて説いて言はく、我一人

阿弥陀経を説くのみならず、六万の諸仏舌を出だし三千を覆ふて阿弥陀経を説くと云ふと雖も此等は釈迦一仏の説なり、敢へて諸仏は来たりたまはず。此等は権文なり。四十余年の間は教主も権仏・始覚の仏なり。仏権なるが故に所説も亦権なり。故に四十余年の権仏の説は之を信ずべからず。今の法華涅槃は久遠実成の円仏の実説なり。十界互具の実言なり。亦多宝十方の諸仏来たりて之を証明したまふ。故に之を信ずべし。阿弥陀経の説は無量義経の未顕真実の語に壊れ了んぬ。全く釈迦一仏の語にして諸仏の証明には非ざるなり。二に経に就いて信を立つとは、无量義経に四十余年の諸経を挙げて未顕真実と云ふ。涅槃経に云はく「如来は虚妄の言無しと雖も、若し衆生虚妄の説に因つて法利を得ると知れば、宜しきに随つて方便して則ち為に之を説きたまふ」と。又云はく「了義経に依つて不了義経に依らざれ」^上。是くの如きの文一に非ず。皆四十余年の自説の諸経を虚妄・方便・不了義経・魔説と称す。是皆人をして其の経を捨て、法華涅槃に入らしめんが為なり。而るに何の恃み有りて妄語の経を留めて行儀を企て得道を期するや。今権教の情執を捨て、偏に実経を信ず。故に経に就いて信を立つと云ふなり。問うて云はく、善導和尚も人に就いて信を立て、行に就いて信を立つ。何の差別有らんや。答へて曰く、彼は阿弥陀経等の三部に依つて之を立て、一代の経に於て了義経・不了義経を分かつたずして之を立て。故に法華涅槃の義に対して之を難ずる時は其の義壊れ了んぬ。

守 護 国 家 論